



「あらすじです。」

(宇宙史)

(リステラス星圏史略)

(講談社投稿用)
(児童文学新人賞)
(2018年)
(第2稿+最終稿)
(投稿完了)
(！落選！)

霧樹里守
(きりぎ・りす)

目次

(あらすじです)	1
(第3項)(最終稿)(投稿完了)(! 落選!)	2
第59回(2018年) 講談社児童文学新人賞 (選考経過・報告)	3
(第3稿)(最終稿) (投稿完了⇒落選!)	
(第3稿 表紙)	9
(第3稿 梗概)	10
(第3稿 目次)	11
【 移転 の お知らせ 】	12
(第3稿 0. 上古神代)	13
(第3稿 1-0. ヤツリーダムの物語)	17
(第3稿 1-1. 神殺し)	23
(第3稿 1-2. 碧葉国)	27
(第3稿 1-3. 谷の一族)	30
(第3稿 1-4. 女神信仰)	33
(第3稿 1-5. 白鱗の民)	36
(第3稿 1-5-5. ヤチダモの物語)	38
(第3稿 1-6. 涙滴大陸 後期)	43
(第3稿 1-10. 大陸の滅亡)	46
(第3稿 1-X-X. 幕間劇 3)	48
(第3稿 2. 大地世界)	51
(第3稿 3-0. 支族たち)	52
(第3稿 3-1. 間隙時代)	54
(第3稿 3-2. アルヴァ・タウレ)	56
(第3稿 3-7. (幕間劇 4))	59
(第3稿 美麗天地)	60
(第3稿 4-6. 再起と宇宙開発)	65
(第3稿 5. 地球再生)	68
(第3稿 三界の物語)	71
(第3稿 7. ジースト)	73
(第3稿 8. 統一銀河)	74
(第3稿 9. リズ～未法宇宙)	77
(第3稿 女神たちの転生課題)	81

（第2稿）	
（第2稿）	85
0. 『上古神代』	86
0. 『上古神代』	87
（幕間劇1）（ヤツリーダム物語）	91
1-0. 《ヤツリーダム》の物語。	92
（1. 涙滴大陸）（前期）	100
1-1. 《神殺し》。	101
1-2. 《碧葉国》の物語。	106
1-3. 《谷の一族》	110
1-4. 《月女神》信仰。	113
1-5. 《白鱗の民》と《谷》の終焉。	116
（幕間劇2）	118
『ヤツリーダムの物語 2』	119
1. 《涙滴大陸》（後期）	124
1. 《涙滴大陸》（後期）（1-6~10.）	125
（幕間劇3）	128
ヤツリーダムの物語 3	129
2. 《大地世界》の物語	131
《大地世界》の物語（※）	132
3. 《地球》の終わりの物語	133
2. 『地球の終わりの物語』 2-0. 支族たち。	134
2-1. 『間隙時代』の変遷。	136
2-8. 『最終戦争』	138
4. 《美麗天地》の物語	141
4. 美麗天地の物語	142
4. 《リスタルラーナ星間連盟》の設立。	146
5. 地球再統一	149
5-1. 《地球》再統一。	150
6. 《三界》の物語	153
6. 《三界》の物語。	154
7. 《ジースト》の物語	155
（※）	156
8. 《統一銀河》の物語	157
8. 《統一銀河》代。	158
9. 《リズ》から外へ。	161
9. 《リズ》から外へ ～ 末法宇宙の物語。	162
奥付	
「あらすじ」の梗概。	167

(目次) (仮) (※⇒項番統一!) 168
奥付 170

(あらすじです。)

(あらすじです。)

(第3項) (最終稿) (投稿完了) (! 落選!)

(第3稿)

(※最終稿※)

(投稿完了)

(! 落選!)

第 59 回 (2018 年) 講談社児童文学新人賞 (選考経過・報告)

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

2018 年 8 月 12 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_1.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_2.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_3.jpg

...い、いやなことは、1回で済ませるに限る...ッ！！

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/a.html

> 第 59 回 (2018 年) 講談社児童文学新人賞

> 選考経過・報告

>

> 第二次選考の通過者を発表！ 2018.7.27

>

> 今年で 59 回を迎えた児童文学新人賞に、530 作品のご応募をいただきました。

> バラエティに富んだ、個性あふれる作品の数々をご応募くださったみなさまに、心からお礼申し上げます。

>

> このたび、第二次選考に残った 34 作品をご報告いたします。どの作品も力作揃いです。

>

> 8 月上旬に最終候補作を、8 月下旬に受賞作品を、このページで発表いたします。

> 今年度の栄冠はどの作品に輝くのか？ どうぞ、ご期待ください。

>

>

...ちっ！...やっぱり...『落ちた』か、『郵便事故で届かなかった』か、

...どっちか？ だったか...ッ！（TへT）！...★

（そして...おそらく...「要求されてる方向性と、違った。」らしい...www

↓

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/b.html

> 第59回(2018年)講談社児童文学新人賞

>

> 選考経過・報告

>

> 最終選考の通過者を発表！ 2018.8.8

>

> このたび、最終選考に残った5作をご報告いたします。

>

> 今年度は、どの作品が栄冠に輝くのか？

> 受賞作品は、8月下旬に発表いたします。どうぞ、ご期待ください。

>

> ヌック・マッティの銀の夢 釘子乃一

>

> たたきつぶす国語くさかべ かさく

>

> 青の楽園黒木 ぶどう

>

> お絵かき禁止の国 長谷川 まりる

>

> 14歳日和 水野 瑠見

>

> (順不同)

...ふむ...(^^;) ...

...「この賞」の「受賞傾向」は...「わたし向きじゃない」かも...w

...(とりあえず、この項終わり！)

(第3稿) (最終稿) (投稿完了⇒落選！)

(第3稿 表紙)

『あらすじです。』

(宇宙史)

(リステラス星圏史略)

(第一部)

(講談社投稿用)

(第3稿)

(最終稿)

霧樹里守

(きりぎ・りす)

(第3稿 梗概)

「あらすじ」の梗概。

この本は、とある銀河宇宙の歴史の始まりと...終わらない終わりの...物語、です。

対象読者は、まず私。

いじめとネグレクトでどこにも居場所がなく、小学2年でリストカットを始めた...私のための、物語。

すべては幻影。

流転する、まぼろしのなかの...「星の海」。

不登校児として保健室で自習し、副教材の「世界人権宣言」を読んで始めて、自分の居場所を持った。

「生きていていい。」と、言ってもらえた...

そんな孤独な子どもが、「ただ存在する」ことを赦される...

そんな広大な宇宙の、

塵のように小さな、わずかに光る魂たちの、

流転し、生成する...

歴史の、物語。

(第3稿 目次)

(目次)

0 『上古神代』～『四界神話』

1 『涙滴大陸』年代記

幕間劇1 《ヤツリーダム》の物語

《涙滴大陸》前期

幕間劇2 《ヤツィーダム》の物語

《涙滴大陸》後期

幕間劇3 《ヤチダモ族》の物語

2 《大地世界》物語 ⇒別巻詳述

3 《泥球界》の物語

4 《美麗天地》創造

5 《地球》統一史

6 《三界》の物語

7 《ジースト》の物語 ⇒別巻詳述

8 《統一銀河》の物語

9 《末法宇宙》の物語

X. 『女神たちの転生課題』

∞. 『喪われた星々の物語』

【 移転 の お知らせ 】

☆
 ☆ 超～大幅に！ 加筆&改稿した2023年版、
 ☆
 ☆ こちらに移転しました。
 ☆
 ☆
 ☆ 『 試験に出る 宇宙史 』
 ☆
 ☆ ...《リス テラス 星圏》史略 概論
 ☆
 ☆
 ☆ <https://novelpia.jp/novel/3862>
 ☆
 ☆
 =====

(講談社投稿用) (第2稿) + (最終稿)

(2018年) ⇒ (投稿完了⇒落選!)

=====

(第3稿 0. 上古神代)

0. 『上古神代』

始原世界《センサリテヤ》。

時間・空間・重力と、生死と奇蹟と運命すらも、超越したところ。

また《究極の青》とも呼ばれる。

淡く青く、濃く蒼く、また黄金と鬱金の、煌めく輝きに満ちた、夢幻美宮の界。

治めるは主宰母神〈マンマ・ワァガ〉。

「もはや姿を持たぬ神」。

また、《遍自在神》とも呼ばれる。

0-0-0. 『四界神話』

〈マンマ・ワァガ〉はおりにおりに界卵を産み落とす。

ある時、その数は一度に四界であった。

この面倒は手に余ると副主宰神〈レ・リナル〉はしばし思案し、

界卵を託すため、若き神々らを集めた。

神々の数もまた卵に合わせて四つ柱であった。

若き神々らはまた、「いまだ姿ある神」とも呼ばれた。

0-1-1. 〈リースヒェン〉

「謹んで承ります」

若き姉神〈リースヒェン〉は、膝を折って界卵を拝領した。

女神の姿は細く白く丈高く、薄い金の長い髪、瞳は水のごとく淡い白蒼であった。

0-1-2. 〈グアヒィギル〉

「慶んで引き受けよう！」

若き兄神〈グアヒィギル〉は界卵を掌中におさめた。

男神は丈高く筋隆々たる美丈夫で、その肌は黒曜石の輝き、黒い巻き毛に黒い瞳であった。

0-1-3. 〈マリアヌ〉

「まあ、嬉しいわ！」

妹神〈マリアヌ〉は歓喜にふるえながら界卵を抱きしめた。

少女神は豊かな緑の巻き毛に碧の瞳。四つ柱の中で最も幼き神であった。

0-1-4. 〈ティアスラァル〉

「無理です」

弟神〈ティアスラァル〉は畏れて辞退した。

薄茶色の長い髪に薄茶色の大きな瞳の、少年神であったと言われる。

0-2-1. 《エルース・ア・マーリア》

姉なる神〈リースヒェン〉は界の名を学都《エルース・ア・マーリア》と定めた。

智と探求を求める神々と、仙人と仙獣と聖なる精霊らが集い、
《光なす内球の界》とも称した。

0-2-2. 《ボル・ド・ガスドム》

兄なる神〈グアヒィギル〉は界の名を戦勝の都《ボル・ド・ガスドム》と定めた。

勝利と闘いと贖いの血とを求める荒々しき神々と、獣神と妖霊らが集い、
《焔洞界》とも号した。

0-2-3. 《ダイ・レム・アールス》

妹なる神〈マリアヌ〉は界の名を《ダイ・レム・アールス》と名付けた。

技芸と舞楽を好む若き神々と神獣と仙獣と小さき精霊らが集い、
《永遠無窮の大地》世界と呼んだ。

0-2-4. 《ティ・カーセル・ラース》

弟なる神〈ティアスラアル〉は再び固辞した。

ゆえにその界は大いなる空白、《ティ・カーセル・ラース》と呼ばれた。

界卵は孤独に育ち、魔神と半神と獣神ら妖霊らが放縦闊歩して、これを《泥球界》とあ
だ名した。

0-3-1. 諍い

姉神リースヒェンは潔癖にして癩性。
血と騒乱を好むグアヒィギルらを忌避し、
ボル・ド・ガスドムの民を遠ざけた。

ボルドムの民らは
壮麗なる都エールス・ア・マーリアへの訪問を望むも、
これを「野蛮」とさげすみ、姉神は拒絶した。

0-3-2. 騒乱

グアヒィギル怒りて天界の守護使を退け、
血刀ひっさげ乱入し、天の聖なる奥宮で、
むりやりに女神を穢した。

女神は怒りて自らの首を斬り落とし、
男神に首を投げつけて、
上神界へと姿を消した。

狂乱する男神の怒号のままに、
ボルドムの民はすべて天界に押し入り、
エルシャムの民を屠り、また穢した。

0-3-3. 侵害

妹神マライアヌは大地界に逃げ来たる者らよりこれを聞き驚き恐れ、
急ぎ天界へ赴き兄神を諫めるも、
兄神は妹神をも打擲し罵り辱め、

ボルドムの民は勢いのままに
ダレマスの民をも襲い穢した。

0-3-4. 終焉

これを聞き上神〈レ・リナル〉は驚き呆れ、
急ぎ大地界へ赴き暴れる神グアヒギルを捕縛した。

マライアヌは消沈し、界を見捨てて〈センサリテヤ〉へと還った。

0-4-0. 諦観

ティアスラアルはただその騒ぎを観ていた。

何もせず、ただ、静かに観ていた。

(第3稿 1-0. ヤツリーダムの物語)

1. 《ヤツリーダム》の物語

1-0-0. 僭称する《神》

主界神〈ティアスラアル〉は〈何もせぬ神〉と呼ばれた。
そのため《泥球界》ティカーセラスは無法の世界であった。

いさめる者がなきゆえ、好き勝手に外界より侵入し来たった精霊たち妖霊たち魔霊たち、
また力ある悪霊たちまでが、自由に往来し、放縦のかぎりをつくした。

しかしながら咎める者なき無秩序。
それはむしろつまらなかった。
放霊たちは法なき世界にすぐ飽いた。

やがて、最も力ある者、妖しく光り輝く者が、
自らを〈太陽神〉と号し、
より弱き者らを従え脅かした。

「力ある者の専横こそが、唯一の法である。」と

〈太陽神〉は宣した。

これが《泥球界》での初めの掟となった。

1-0-1. 「ヤ・ツリーダム！」

この僭称王たる〈太陽神〉は、いまだ格低き「姿ある神」であった。
肉性を好み、暴政を嗜虐した。

ある時、気まぐれにひとつの小さな水の精に目をとめ犯した。

泣き叫びながら犯された水の精はやがて一群れの卵を産んだ。

卵から生まれ出た仔らは
細長く小さく平たいぶかっこうな体に
平たい四ツ足と、
太く短い尾を持つ姿で、

肌の色は茶まだらで醜く、
弱く、歯も牙も、爪さえ持たず、
のたのたと無様に地を這うばかりであった。

「ヤ・ツリーダム！」（なんと醜い！）

〈太陽神〉はひとこと吐き捨てると、哭きむせぶ水の精をも見捨てて去った。

それがこの仔らの最初の名前となった。

1 - 0 - 2. 〈水霊母〉

水の精は困り果てた。

幾万となく生まれた卵塊から孵ったばかりの醜き仔らが、
まもなく次々と苦しみもがき、死に絶え始めたのである。

母は水の精であるがゆえに
泥水の海の底の底の底で卵を産み護り孵したが、

生まれ出た仔らは空の者である太陽神に似て、
水の中に長く居ることはかなわぬ存在だった。

母は大慌てで口から大いなる泡を吐き、
泡の中に生き残った幾千かの仔らをくるんで、

大慌てで海の上の、空とのあわいにまで持ち上げた。

ところが仔らは水面に浮いて泳ぐことさえ長くは出来ぬのだった。

次々ともがき溺れ死ぬ様を見た母は

大慌てでまた海の底の底へ戻り、
泣きむせび平伏嘆願して弱き仲間らのかぎりある力を全て借り集め、
海の底の底から泥と岩をこねあげ押し上げて突き固め、
なんとか仔らを載せる小さな陸の揺籃を造った。

この深く強い母の愛をもって名もなく小さな水の精であった者は〈力ある水の霊〉となり、

これより後〈水霊母〉と呼ばれた。

1 - 0 - 3. 剥奪

ところが水の中からようやくに出た生き残りの幾百かの仔らは、
空気のなかでは肌が乾いて、ひび割れて次々に死んでしまうのだった。

地の上にあがれぬ母は水辺から身を乗り出して涙を落とし、
弱き小さき仔らの肌を護った。

眠る暇さえ惜しんだ。

それを遠くから見かねた父なる〈太陽神〉が再び襲い来た。
「来い。それよりはマシな子種を仕込んでやろうぞ！」

母は哭き叫びながら力づくで連れ去られた。
飢え乾く幾十匹かの仔らだけが残された。

1 - 0 - 4. 〈いちばん強い〉と〈いちばん大きい〉

空は無慈悲に乾き、天は無慈悲に照らした。
みるみるうちに乾いてゆく泥溜まりの底の底に
とり残された仔らは身を寄せ合った。

〈いちばん大きい〉と呼ばれる《グェップロップ》は仲間たちと声をかけあった。

「小さいやつを中に入れてやれ。
弱いやつは真ん中に入れてやれ！」

干乾びてゆく浅い泥水の底の底を掘り、
小さく弱いものらの中に沈めて、
大きいものらは交代で外に出て、
奪われた母の代わりに短い尾の先で、
弱いものたちの背なや頭に、
ぼしゃぼしゃと必死で泥をかけやるのであった。

やがて、もう自分たち全てが入れるほどの
泥の大きさは残っていないと気付いた

〈いちばん強い〉《グェップラップ》が言った。

「おれは、母を取り戻せぬか、見て来る。」

沼辺のふちの高い崖を乗り越え、
固く乾いた岩漠の果てに、
彼は姿を消した。

〈いちばん大きい〉兄弟《グェップロップ》は、その大いなる姿で
小さく弱いものたちに日陰を造ってやりながら、
去ってゆく《グェップラップ》を、
ただ、哀しく見送るしかなかった。

1 - 0 - 5. 〈いちばん弱い〉と 〈いちばん小さい〉

泣き叫び嫌がり逆らう《水霊母》をふたたび無理矢理に犯し
二度目の卵を孕ませてはみたが、
怒り狂い威嚇し拒絶するだけの女霊をただいたぶるにも飽いて、
媚びへつらう美しい笑顔の他の女精たちに、
〈太陽神〉はすぐに気をうつした。

そのすきをついて逃げ出した母が、ようやく戻った。その時。

累々と固まる干乾びた《ヤツリーダム》たちの
無惨な遺骸の山のかたすみ、
かろうじて生きて残されていたのは、

息絶えた兄弟らによって真ん中に入れられ、
むくろの山の日陰に護られていた、

〈いちばん小さい〉と〈いちばん弱い〉の
末の弟妹だけだった。

二匹は喪われた兄姉の遺骸の肉をはみ、
血膿まじりの泥をのみ、
もはや流す涙すらなく、
ただかろうじて震えながら息をしていた。

その眼は虚無だった。

母は嘆き伏しのたうち、ただひたすらに〈太陽神〉を怨み、呪った。

1 - 0 - 6. 《月女神》

その母の血涙の慟哭の、
世の涯てまでもと叫ぶ悲嘆を聞き及び、
ようやくに上つ界より正義なる神〈レリナルディアイム〉が
低く醜き《泥球界》まで降りて来たった。

白銀に光る長い髪に銀に光る鋭い瞳の伶俐なる上界女神は宣した。

「〈太陽神〉と名乗る者。
おのが身分をわきまえるがよい。

この界のあるじは〈なにもせぬ神〉ティアスラァル。ただ一柱のみである。」

これがこの界における二度目の掟となった。

僭称神とその眷属らは怖じ恐れ、捨て科白を吐き捨てると、疾く去った。

残されたのは水霊母が二度目に産んだ、衰れな卵塊の仔らのみであった。

この仔らはやはり海に泳げず空も飛べない、
父神に似ず翼なき姿の、
二足二腕のみの不具の姿であったが、

すでに心を病んだ水霊母は、
この仔らをかえりみることはなかった。

1 - 0 - 7. 〈慨嘆の一族〉

〈いちばん小さい〉 ガップレップと
〈いちばん弱い〉 ガップヤップの弟妹は、
哀れにおもった上界月女神にまもられて
《涙滴大陸》の湿気た沼地の
穏やかな淵に棲まうこととなり、
やがて夫婦となり、卵を産んだ。

生まれた新しい仔らの産声にひかれて
姿をあらわした《水霊母》は、
喪われた古き仔らに生き写しの姿に魂を傷め、

「ヤ・チーダム！」（なんて可哀想な！）と叫んだ。

それが彼らの二度目の名前となった。

哀しみのあまり姿を隠した《水霊母》は
深く深く海の苦しみの底の底に身を沈めたまま、
長く長く仔らの安寧を願いながらも、
天と太陽を呪い続けた。

(第3稿 1 - 1. 神殺し)

1 - 1. 《神殺し》

1 - 1 - 0. 《名すら無き者》

長い長い時が経った。

《水霊母》が《太陽神》から、
むりやりに産まされた二度目の卵群は
誰からも省みられることなく、

ただ地の熱に蒸されて孵り、
幼いうちからたがいを憎み、
競い争い、食らいあって育ち、

強者が弱者を喰らい、
また犯して産ませ、
産み捨てられ、
いたぶられ、逃げのびて育った。

彼らを呼ぶ者として他になく、
彼ら自身もみずから名乗ることがなかった。

1 - 1 - 1. 《袋を持つもの》

そうして無知にして無慈悲のままに、何億代かが過ぎた。

生き延びおおせ、
勝ち残るために、
より強くあるために、

彼らは平たく這いつくばる四ツ足と鱗の姿から、

長く伸びた四肢と首とくちばしと、

軽く暖かく空気をはらむ、
みごとな羽毛もつ姿に変化した。

より速く逃げ、より確実にわが仔を護るため、
女雌たちは腹に卵や袋を持った。

1 - 1 - 2. 《コ》族

生きのこるために彼らは学習し、
やがて記憶と知識を持った。

始まりの言葉が生まれ、
語り継がれる物語が生まれた。

仲間と敵の見分けかた、
群れることと護りあうこと、

時に応じて切り捨て裏切り
見捨てて生きのびることを

学んだ。

その中で最強の者らはやがて自らの仲間を《コ》族と名付けた。

産み増えて地に満ちたが、心は常に孤独であった。

1 - 1 - 3. 《神》

まえの長老のまた前の長老の、そのまた前の前の大昔の長老が、
この世の始まりには《神》というものがあつたと語り伝えた。

そのような伝え語りすら記憶の闇に隠れるころ、
《コ》族の〈へ〉という者がおとぎ話を笑い飛ばした。

「カミなぞおらぬ。この世の最強は、ただ《コ》族のみ。」

1-1-4. 《天雷》

その時、天が轟き揺らめき、地が裂け割れて、崩れた。
人々は怖じ恐れて〈へ〉の不敬を罵倒した。

やがて天地が冷え、冷たい雨が〈冷たく白い沙〉に変わった。

草木は枯れ、虫は死に、
人々は飢え、獣も餓えた。

1-1-5. 《魔竜》

〈冷たき白き沙〉に埋もれた山中より、
火のように熱く焦げた息を吐く、餓えた巨大な魔竜が現われた。

次々に《コ》族を襲い、弱った子どもや孕んだ雌らを喰らった。

人々は噂した。

「あの恐ろしき魔のモノこそが、《神》というものに違いない！」

1-1-6. 《神殺し》

〈へ〉は嗤い飛ばした。

槍を研ぎ、仕掛け弓を張り巡らし、怯える同族らを叱り飛ばして、
ただひと群れで《神》を襲った。

死闘の末、《神》は斃された。

斃した神の肉を喰らって、《コ》族は冬を乗り越えた。

1-1-7. 《神殺しの智王》

あまたの同族を率い、策略の限りを用いて
《神》と呼ばれた巨大な魔竜をみごと斃した〈へ〉は、

その勲しを讃えられ、

《神殺しのコ族の王》〈コ・ヘウ・ケ・レンテン〉と呼ばれた。

それまでは強き者らが無秩序に争いあっていた《コ》族の
全てを束ねる者となり、

やがて手足となる眷属が生まれ、
王族と貴族と呼ばれ、

下つ奴婢民どもと
上つ上長族との、
区別が生まれた。

(第3稿 1 - 2. 碧葉国)

1 - 2. 《碧葉国》の物語。

1 - 2 - 1. 災厄の巨平石。

《神殺し》たちが数を増やし、
姿を増やし、
海辺の磯浜から山上の岩漠にまで、
棲む領域を広げに広げたある時。

天空を斜めに切り裂き、燃えさかる《巨平石》が墜ちてきた。

巨大なる平石は燃えさかりながら斜めに墜ちて、
荒れ狂う北の海面に当たり、

墜ちた勢いのまま二度、三度と、
斜めに飛びあがってはまた落ちて、
跳ねて、進んだ。

《大いなる壁のごとき大波》が起こり、
浜辺ちかくに棲息していた《神殺し》たちと
その眷属とその敵とを
全て一息に飲み干した。

飛び跳ねつくした平石は勢いのまま、
大陸の岸辺を飛び越え、
大岩壁に当たって止まり、

大いなる熱を発して、
大地をことごとく溶かした。

その後へ幾度も幾度も、
大波が襲い掛かった。

1 - 2 - 2. 大寒冷。

波は久しく折り重なり荒れ狂い、
空は激しく昏く燃えて荒れ狂い、
冷たき酷寒と狂風の時代が続き、

《神殺し》たちは溺れ、凍え、餓え、
冷えて動かなくなり、
次々にほとんど死んだ。

生き残る者は互いにあい喰み、ただ強い者だけが残った。

ようやくに天が開き陽光が戻った時、
《神殺し》たちのうちには、雌や子どもが全く残らなかった。

そしてようよう地が冷め乾き、
埋もれた平石の周りが冷えた時。

そこから出て来た者たちには、なにゆえか、
雄の成獣が全くいなかった。

1 - 2 - 3. 《胎卵》の一族。

大いなる燃える平石を《ほしのふね》と呼ぶ
美しい雌たちは、
《神殺し》たちと取引をした。

交わって、卵を産もう。
産んだ卵を温めて、孵そう。

無事に生まれた2つまでは《神殺し》に与えよう。
そして3つからは、われら《ほしのふね》の跡継ぎに貰う。と....

墜ちてきた雌たちは《神殺し》の大いなる雄らと交わり、
その不可思議な胎の袋で
大いなる一つの卵を護り、孵した。

《神殺し》たちは奇異なる姿の賢く美しい雌たちと喜んで交わり、
産み育ての母から知恵を授けられた我が仔を一族に得て、
更に喜び、
やがて再び、ますますが増えて栄えた。

《ほしのふね》のまわりに移り澄んだ雌たちの子孫らも、
やがて地に増え、広がり続けた。

1 - 2 - 4. 《碧葉の樹》の国。

《ほしのふね》の子孫たちは雄も雌も産まれてやがて地に増え、
《ほしのふね》の落ちた周りには大いなる異種の樹林が育った。

子孫らはその円環の森を《碧葉の巨樹の森》と呼び、
自らの領土を《碧葉国》と号した。

1 - 2 - 5. 王国の乱立。

《神殺し》たちはそれまで
《国》という知恵がなかった。

一族の封土に壁や印を築き、
その土地に名をつける知恵が、
瞬く間に流行り、
次々に《国》が開かれた。

やがてまたゆるゆると大地と気候が動き、
冷えて冷えて棲みづらくなった土地から、
《胎から仔を産む者たち》が、
新たに移動してきた。

《国》の数は増え、
《民》の種類も増え、
それぞれに合い争い、
強き者らが、栄えた。

(第3稿 1 - 3. 谷の一族)

1 - 3. 《谷の一族》

1 - 3 - 1. 横穴の民。

ある時、
《神殺し》らは滅多に近寄ることもなき辺境の、
《実のならぬ臭い葉の樹の森》の広大な谷間に、
いちどきに大勢の《異形の民》らがやってきた。

二本の足、二本の腕だが、
尾はなく、顔は平たく、牙もなく、
毛皮もなくて、翼羽もなかった。

雌たちは股の穴から直接、
血まみれの赤い仔を産んだ。

とにかく数が多かった。

彼らの故郷は海の向うの陸地ではなく、
天から落ちて来たのでもなく、

涙滴大陸の《背骨の山》の
《谷の穴》から、
「湧いて出て来た」と称した。

1 - 3 - 2. 教えの《谷》。

彼らはそのまま《実のならぬ臭くて痛い葉の》
大樹の谷に棲みつきたいと申し出たので、
《神殺し》の王らはみな嘲笑して、許可した。

「虫も獣も、果実もない土地ぞ。
その人数で、なにを食する？」

《穴から湧いた民》たちは、
許可を得たりと喜んで、

地を掘り虫を捜し出し、
草を編んで網を造り、
川を漁り、
底の底に隠れた魚を、
罟にしかけて、
集めて、貯めた。

木片を操って火を起こし、
火炎で炙って王らに供した。

《神殺し》の王らは珍奇な食物のあまりの旨さに
仰天してよだれと涙を流し、
その知恵と五本の手指の器用な技に感嘆し、
狡猾に、教えを請うた。

「谷の土地は貸してやる。代わりに、その技を伝授せよ。」

それより後、《谷》の一族は《教えの民》とも呼ばれ、
あらゆる知恵と技術を授けるために、
《神殺し》たちが好んで棲む、熱く湿った地方へと、
入れ替わりで訪れ、《教えの旅》をした。

1 - 3 - 3. 凍死と養子

やがて再び天地が動き、
山は育ち、時は移り、
命も次々に死んで生まれて、
代々の入れ替わりが進んだ。

ある時、短いが深刻な《大寒冷》が訪れ、
《卵》の者らは雌と跡継ぎを、ことごとく全て失った。

《胎から仔を産む者》だけが寒冷に耐えて残った。

《卵》の者らは胎仔の者たちに、
代価を払って養子を迎え、
それぞれの言葉や領土を、
継ぐ者として教え育てた。

《谷》の一族から尾のない賢い子どもらを
買い取り養子に迎える王家も多く、
やがて大陸の南の大半は、
《股の穴から赤子を産む者》らで満ちた。

1 - 3 - 4. 《帝国》の成立。

《谷》の者らは無用の争いを好まぬ民だったが、
幼くして《神殺し》らの養子とされた者は
適応して戦の上手に育った。

《谷》に生まれおち《神殺し》に渡され、
戦に慣れて育った者らは、
狡知と叡智を合せ持ち、
姦計を巡らし権勢を競い合い、
軍を造り国を盗り、
領土を増やしに増やし、
それらを差配するために仕える者らを育てた。

やがて、血にまみれた《王のなかの王》ただ一人が勝ち残り、
大陸すべてを版図となし、
それを《帝国》と号した。

《谷》の一族は無用の流血を好まず、
《帝国》に臣従を誓った。

(第3稿 1 - 4. 女神信仰)

1 - 4. 《月女神》信仰。

1 - 4 - 1. 《時の横穴》

ふたたび地は動き、山は育ち、陸は広がり、
草木は萌えて増え広がった。

《碧葉国》と《神殺しの帝国》は、
主に気候の温暖な大陸の北西海湾に栄え、

冷涼で急峻な南の内陸山地には、
《谷》からのわずかな移住者と、
ひとまとめに《異族》と呼ばれる少数部族の者らのみが、
まばらに棲んでいた。

ある時、塞がれていたはずの《谷の横穴》に、
ひとりの女が墜ちて戻らぬ事変があった。

これを憂えた《月女神レ・リナル》が、
天より降り来たりて《穴》をふさいだ。

「地が動き、蓋がずれた。」と。

1 - 4 - 2. 《月女神殿》

《時の横穴》をふさぎ見張りの幽兵を配し、
その地にそのまま堅牢なる銀の城砦を築き、
《銀月女神》はそのまま、しばし留まった。

《神殺し》たるを誇る《帝家》はこれを苦々しく思ったが、
版図より遠き寒き山塊のことゆえ、あえて構いつけはせず、

そのまま黙殺として捨て置いた。

1 - 4 - 3. 《月女神》信仰。

《谷》の人々はこの都邑を《月女神殿》と呼び、
畏れ敬い、次々に訪れた。

それまで心の拠りどころたる《神》というものを
持たずにきた《涙滴大陸》の余の者らも、
これを奇に思い、畏れ敬った。

やがて《月女神》はまた
「すべての雌と女たちの守護者」であるとされ、
子宝や良縁や、また離縁を望む者らが続々と遠方より訪れた。

1 - 4 - 4. 女剣士（ルワ・ヘルマ）と女騎士（ルワ・ブラダ）。

《月神殿》を詣でる女と雌たちを護るために《女剣士》と《女騎士》がうまれた。

それまで《帝国》においては雌と女は泣きながら男と雄に犯され、
哭きながら使役され、
嘆きの子守唄を低く呟きながら
子や仔を産み育てる為だけの奴婢であって、
決してそれ以上ではなかったが、

《女剣士》と《女騎士》が力と智慧を得て、
男や雄たちと互角に闘い得ることを見て、
人々の心が変わった。

月女神の守護を得た女は、
すべての男が定めた掟から、
解き放たれて自由となる、
という不文律が創られた。

初代の《女騎士》の名をリ・リィ＝カ・タナンという。

奇しくも、《時の横穴》に墜ちて死んだ女が遺した娘で、
《谷》と《碧葉》の血を併せ持ち、

金の長い髪に金の瞳の、
白真珠の肌の細身の姿であった。

1 - 4 - 5. 巫女戦士

《谷》と《帝国》の契約に基づいて《献納戦士》とされた女が、
その戒律を反故にするため

月女神に誓いを立て、
初の《巫女戦士》となった。

その名は《ハユンのアマラーサ》。

黒髪黒瞳、褐色の肌、男勝りの大柄な女であったと伝える。

《大旱魃》に際して飢饉に襲われた《谷》の戦士と共に、奪われた《水神娘》を救い出し、
涙滴大陸を餓えから護った。

1 - 4 - 6. 月女神、去る。

大地鳴動し、大山脈が再びみたび激しく隆起し、街道は崩落した。

「足で歩む者は二度と再び《時の横穴》には近づけぬ。」と宣し、

《銀月女神》は《泥地界》を去った。

女神が残した《三親の法》(ミトラの教え)だけが残り、

幾度となき禁令にも耐え、
長く広く帝国内外に流布された。

(第3稿 1 - 5. 白鱗の民)

1 - 5. 《白鱗の民》と《谷》の終焉。

1 - 5 - 1. 《白鱗の民》

いつの頃からか帝国の海辺に《白い鱗の一族》が棲みつき、次第に増え始めた。

彼らは一見して柔弱温和であり、
海産物と陸産物との交易で富を得て
穏やかに暮らしていたが、

その内実は妬心に満ち満ちて
また狡知に長け、

《谷》と《帝国》と《碧葉国》の
協和と繁栄をねたみ羨んで憎み、

《涙滴大陸》の陸上全土をも
いつか《海族》の版図とせんと、
秘かに謀り、たくらんでいた。

1 - 5 - 2. 《谷》の焼失。

ある代、現帝崩御の報と共に生じた帝家の後継争いの混乱に乗じ、
一斉に攻め入られて帝城央都はことごとく灰燼に帰した。

《谷》もまた大火が放たれて、乾季の森は炎上し滅した。

1 - 5 - 3. 《帝国》の復仇

《白鱗》の呪師が放たれ、激しい雨風が続き、
《涙滴大陸》の全土は泥濘と共に押し寄せた軍勢に呑まれかけたが、

帝家唯一の生き残りであった妾腹の皇子ミアルドが
地方公らを号して軍を立て応戦し、
これをよく防いだ。

1 - 5 - 4. 流病と回生。

やがて雲が切れ再び乾季の訪れと共に
《白鱗》と《海族》のみが死に至る病が流行り、
騒乱の日々は収まった。

復仇の皇子ミアルドが新帝家を築き《再興帝》と呼ばれた。

これより帝国は危難に備え《石の街道》と《石の守護都》の網目を築きあげ、
大陸全土を唯一の《帝軍》にて掌握し、直轄の版図とするに至った。

《再興帝》の妾にして初代の女宰相となったディア・レスト＝ディアが、
この運営を賢く補佐したと長く帝家訓に語り継がれた。

(第3稿 1-5-5. ヤチダモの物語)

(幕間劇 2)

1-5-5『ヤツリーダム物語 2』

ある大嵐の翌朝、
大湖沼地帯の岸辺の泥だまりのほとりで、
群れからはぐれたらしい四ツ足の仔が1匹、
母を求めてか、しきりと鳴き泣きしているのを、
通りすがりの二本足の女が聴きとめた。

孕んだ大腹を抱えたまだ若い女は、
異族とはいえ迷子の幼生を見過ごせず、

さりとしてあたりを見渡しても、
春の大雨の後の大增水の、さらにとどめの嵐で、
目の届くかぎり一面の水びたし。

迷仔がもといた沼が何処であったかなど、
とても見分けられそうにない。

しかたなく女は片手でひょいとその仔をつかむと
すたすたと自分の村の自分の家まで戻り、
一番大きなたらいに庭先の流れの泥水を満たしてその仔を放ち、
ときおりは日当たりで体を干して休めるようにと板きれを斜めに渡して、
泥一面の岸辺にいて水草も埋もれて食餌もとれなかったろうと、
屋根から吊るして増水から護ってあった保存食の中から、
海藻の干したものを少しばかり水でもどして
ほいほいと喰わせてやった。

がつつと喰らったその仔は腹がくちくなるとようやくに鳴きやんで、
「...あんにゃ〜！」と、
それまでとは少しようすの違う

お礼のような声をあげ、

やがて安心したのか

たらいの泥水の中から板きれに半分ほど身を乗り出した格好で、
くうくうと寝入ってしまった。

女は微笑んで、増水がひいてその仔が一匹でも生きられるようになるまでは預かるつもりで
毎日まいにち、干した草やら刻んだ水草やらをせっせと用意しては口元に運んでやった。

やがて月満ちて女は子を産んだ。

動けぬあいだは親族や近在の者が入れ替わりでやってきては
二本足の赤子の元気そうな乳の呑みっぷりを誉め、
手の放せぬ女に代わって四ツ足の仔にも
よしよしと撫でてやり餌をやり、
泥水をよいしょと替えてやっては
帰っていったは、また訪れた。

やがて女は不自由なく出歩けるようになると、
まだまだ軽い乳飲み児をくるみ布でよいしょと背負い、
もうずいぶん大きく重く育った四ツ足をえっこらさと抱え上げて、
増水のひいたもとの大河のほとりにまでうんさこらさと運んでやった。

ところが四ツ足はみいと哭き、厭がって女から離れなかった。

「えんにゃー！ えんにゃー！...えんにゃー.....ッ！」

褐色の平たい四ツ足のはぐれ仔が、
どうやら自分のことを実の母と思いこんでしまったらしいと気がついて、
女は苦笑してため息をつき、
またまたえっこらさと抱え上げて
うんうんと家まで戻り、
今度は家の前の小さい沼川に、
ほいっと四ツ足をはなしてやった。

「もう盥の中では狭いだらう。ここならいつでも逢えるよ？」

聞き分けたのか、四ツ足はおとなしく泥沼のなかへ泳ぎこんでいて、

少し嬉しそうに、まだ短い尾でぱしゃりと水面を叩いた。

その晩、

おそらくその仔の母なのであろう
人の背ほどの大きな雌の四ツ足と、
その族長であろうか大きな大きな、
家の屋根を越すほどの大いなる老いた四ツ足が、
そろりと女の家の前に泳ぎ来て、
声をそろえて「あんにゃ〜！」と鳴きながら、
長い首をそろえて折ってぬかづいた。

大いなる二匹の去った後には二本足の喜ぶ水底の光る石や貝殻や、
船から落ちたのだろう古びた金貨が、こんもりと小山に積まれてあった。

仔は時おりは太い河まで出て
親や一族らと遊んで帰ってくるようだったが、

ほとんどいつもは女の家の前において、
食餌は自分で探して水草を摂るようになったが、
朝に夕に、
陽が昇れば「あにゃー！」と鳴いて女を起こしに来るし、
陽が沈めば「おにゃー！」と鳴いて、
女におやすみの挨拶をしに来るのであった。

女はしばらく考えて、
二本足の息子には《双葉》と名付け、
四ツ足の息子には《四葉》と名づけた。

《双葉》は《四葉》ほどは成長が速くなかったが、
人間の子らしい緩さで元気にすくすく育ち、
やがてすこしでも目を離すと四つ這いで
どんどん遠くまで行ってしまうようになった。

ふつうならば一瞬でも気を抜けないところだったが、
なにしろ水辺に墜ちれば《四葉》がすぐに岸边まで押し上げてくれるし、
屋根から落ちそうになれば全力で叫んで知らせてくれるして、
女はずいぶんとラクをさせてもらった。

「... こういうのも、乳兄弟って言うのかねえ...？」

いつでも一緒の小さい一人と大きな一匹を楽しく眺めて、
近在の者らはいつも笑いあうのであった。

やがてどんな年寄りでも覚えがなほどの大雨と大水が続いた。

噂では《白鱗》の魚人族がカとミの秘術を使い、
二本足が治める帝国を滅ぼさんとして
大陸大地の水没を謀ったのだということだった。

誰もなすすべもなく
沈みゆく畑を前におろおろし、
流される家をあとに残して必死で逃げた。

女たちの集落も水に呑まれた。

泣き叫びながら人間たちもまた激しい渦にまかれ、
もがきながら泥に沈んだ。

悲鳴は天に響いた。

「……………うんにゃぎゃぎゃ～！ ぎゃぎゃっ！ ぎゅっ！ ぎゅ～～ッ……！！」

それまで誰も聞いたことがないほど大きな大きな大いなる絶叫が、
《双葉》と《母》を背に乗せて
必死に泳ぐ《四つ葉》の喉から溢れた。

二度、三度と続き、それは天と地に轟いた。

「……………うげろーーーーーっぶ！ …」

はるか遠くから、また反対側のかなたからも、応える叫びが次々にあがった。

物凄い速さでいくつもの津波が近づいてきた。

波と見えたが、それは命懸けの速さで泳ぎ寄ってきた、
たくさんの、たくさんの、
《四つ葉》の水中の仲間であった。

仲間たちは《四つ葉》を育てた村の人間たちを一人残らず背に載せて、
泳いで泳いで泳いで泳いで、ようやく、
まだ乾いていた残りの小さな島地を探して上に載せては、
また次の人間を探しに潜った。

「……………やっ、ちだも……！」（なんて、御親切に！）

救われた二本足たちは涙を流して感謝し伏し拝んだ。

それからは《ヤチダモ》が、《泳ぐ四ツ足》たちの新しい名前になった。

やがて大水は引き《白鱗》たちは流行り病であっけなく滅んだと噂が届き、
人々は新しい乾いた土地を探して、
水辺に村と畑を開いた。

《双葉》と《四つ葉》は仲良しのまま元気に育ち、
それぞれに嫁をもらって子を産み育て、
二本足と四ツ足の一族同士も
互いに仲良しのまま、
末長く行き来し栄えた。

この話を伝え聞いた近在の内陸の者、
また遠方の山郷の者らは、

縁起を担ごうとあたりの四ツ足の仲間に声をかけ食餌を貢ぎ、
また像を刻んで、
護符として身につけ家に据えるなどの習わしができ、
次第に話のみが広がり、末永く語り継がれた。

(第3稿 1 - 6. 涙滴大陸 後期)

1. 《涙滴大陸》(後期)

1 - 6. 《石の帝国》

《竜種》とその養子らを含む
《谷》の血筋の者が大陸各地に散在混住し、

その漠然とした権力関係の集合体を
《帝国版図》とみなしていた時代を
《竜の帝国》と尊称し、

《白鱗の乱》後の再興時代は
区別し謙讓して
《石の帝国》と呼び、
また《石造大路の都城の帝国》代とも号した。

1 - 7. その後の《谷》の民

焼失した広大な《谷》から避難し外の世界へ逃れた一族は、
ごく一部を除いて《森》へ戻ることはなく、

生き残ったごくわずかの《竜尾族》と
増え続ける未開の《二つ足》に
生きのびるための叡智と技術を伝え、

田地の水源の掘削と管理法や
嵐や地震にも耐える丈夫な家の造りかたを教え、

集落と都邑を結ぶ街道群の造営と
石造りの広大な都市建築と、

それらを管理する機能的で有能な
官僚機構を築いた。

1 - 8. 身分の分割

やがて《尾無しの二本足》たちは
ふたつに分かれた。

定住し権力を握り、
他族を使役して
驕慢に振る舞うもの達と、

流浪して旅を愛し、
技芸と交易をなりわいとして、
自由と平等を良しとする者たちである。

やがて

権力を持つ者たちは
持つことを拒否する者たちを
憎むに至り、

武力をもって蹴散らし、
これを圧した。

二つ足も他族も、
草莽の民は
貧富と階層とに
職能が細かく分かたれ、
自由と往来は制限された。

奴隷が慟哭しながら売買され、
鞭打たれ、
殴り殺され、
焼き殺された。

1 - 9. 四民平等

やがて小藩都ズードリブルより女の領主が立ち、
女と男の身分の平等を宣した。

まもなく遼原の火のごとく
自由と富の四民平等を説く
教えが広がった。

《救世主》サラ・タイスの世直しが行なわれ、
帝都《石》には新しく
《四民議会》が開かれた。

出自によらぬ本人の
選択と努力による職業と富と婚姻が約定され、

世は潤い、
交易は栄えた。

(第3稿 1 - 10. 大陸の滅亡)

1 - X 大陸の滅亡

突然、天空に大いなる
《銀闇黒の丸い幻影》が現われた。

地の人々はそれを《黒の太陽》と呼び怖れた。

その巨大な円盤は、
宙に浮かぶ都市であった。

降り来たる人々は、それを
《光より速い船》と呼んだ。

船人たちは《石の帝国》の男を殺し、
女を犯し、
子どもを産ましめ、その子を奪った。

彼らの《船》にいた女たちが
病により絶滅した故である。

帝国の男たちは復讐を挑み、
殺され、
女たちは泣き叫び、
ひたすら逃げ惑った。

一計を案じて《光より速く飛ぶ》に潜りこんだ、
勇敢な子どもらがあった。
内部で暴れた。

巨大なる円盤の船は傾き...

墜ちた。

大地はありえぬほどに鳴動し、
すべてが炎上し、
大穴から熔けた大地が溢れ出し、
すべてのものが焼けて、
崩れた。

その跡に、
生き残ったわずかな人々の頭上に、
はるか天高くそびえる
巨大な津波が襲い掛かった。

その大禍つ波の引いた後、
大地は泥と氷に沈み、
はるか山脈よりも高く深く
降り積んだ雪に埋もれた。

これが《水の仔の島》として生まれ、
増え広がり
やがて《涙滴大陸》と呼ばれ、
輝かしき《石の帝国》の版図であった、
始まりの土地《アタ・ル・アンタイス》の、

最期の姿であった。

(第3稿 1 - X - X. 幕間劇 3)

(幕間劇・3)

1 - X - X 『ヤツリーダーダムの物語 3』

天が裂け大地が割れた。

大津波が沸き上がり、
火の玉が森や街に降り落ちた。

飛べる虫と鳥と魚たちは一斉に逃げ出し、
泳げる獣たちは海に飛び込んだ。

二本足のうち知恵や権力のある者は
我先に港に駆けつけた。

金や暴力にものを言わせて我が身と我が財宝と、
我が一族のうちでも特に気に入った者だけを乗せて
残りの不要な者は蹴散らし、
悲鳴と怒号と哀願とを無視して、
船を急ぎ外海に走らせた。

中には貧しい者らに必死としがみつかれて転覆させられる船、
恨まれ火を放たれて港口を塞いで炎上する船、
まさに阿鼻叫喚のちまたであった。

岸边からはるか離れた低い野山にも
情け容赦なく頭上から襲いかかり洗い流す
激しい河津波に吞まれた二本足たちは、
なすすべもなく水に溺れた。

その時、〈ヤチダモ〉たちが一斉に天に声を放った。

ありとあらゆる平たい四ツ足のヤチダモの仲間たち、
大きい者も小さい者も、
尾のある者も四つ鱭でかく者も、

みな急ぎ駆け、泳ぎ寄り、
溺れる二本足たちとその他の陸の者たちを、
あとう限りに
その背に載せた。

荒れ狂う波を掻き分け押し分け、
息もつかずに泳ぎに泳いだ。

荒れ狂う火と水に沈み逝く《涙滴大陸》から
彼方の《未知の大陸》へと、
泳いで泳いで泳いで泳いだが、

浪は荒く高く、水は冷たく、
時には硬く凍りついて皮膚を打ち裂き破り、
二本足らを載せたままでは水に潜り餌をとることも、
背中中の乾いた皮膚に水をかけることすらも出来ず、

多くのヤチダモたちは半ばで力尽き、
その屍を漂流する舟として、

なおも人々を運んだ。

飢え渴いた二本足らは哭きながら
死んだヤチダモの干からびた背中中の皮を剥いて喰い、
脂を燃やして肉を喰い、
屍の舟が底の底の一枚の皮しか
残らなくなった頃、

ようやくに、潮に流されて
はるかな砂の大陸へと
流され着いた。

これが

《涙滴大陸》の最期の物語であり、

《岩沙の大陸》の物語の始まりなのだった。

…『涙滴大陸』終わり。

(第3稿 2. 大地世界)

2. 《大地世界》の物語

《大地世界》とは、

《初めにありし四世界》のうちの第三界、
《ダイ・レム＝アールス》の別名である。

《永遠無窮の大地平界》とも呼ばれ、
《ダレムアス》、また《誰夢明日》
とも書かれる。

この小界の始まりから終わりに至る
女神と神々と人々の物語については、

別巻にて詳述される。

(第3稿 3-0. 支族たち)

3. 『地球の終わりの物語』

3-0. 支族たち。

そのようにして、かつて《涙滴大陸》に栄えた《石の帝国》の二本足たちはごくわずかのみが生き残り、さらに少ない人数ずつに分かれて島々や大陸に散り散りになった。

命からがら飢え乾いて傷つきながら、身ひとつで未知の岸辺に辿り着き、そのまま未知の獣やその地の先住者たる野蛮で巨大な毛むくじゃらの二本足らに喰われて終わった者や、また未知の病に斃れて朽ちる者も多かった。

懸命な努力と偶然の幸運に護られて、生き延びたごく少数の者たちは、しかしやがて徐々に増え、かつて《涙滴大陸》に現われた《白の谷》の人々が《竜尾の一族》から《教えの民》と呼ばれた時代さながら、《岩沙の大陸》の巨大で毛の濃い愚鈍な二本足らを指導し、また使役して、数百年の後には再び各地に《壮大なる石の都》群を築いた。

かつて焼失した《谷》の一族はその後《石の帝国》後期においては職能集団《十色の支族》に分かれ、各地を流浪し分散して生活していたが、造船と交易に携わっていた《青の一族》は《涙滴大陸》の滅びにあたって最も生存率が高く、漂着した《岩沙の大陸》の南岸に強堅な石造都邑の拠点を築きあげると同時に、あとう限り巨大な帆船を次々に造りあげて、他の地に流された仲間達を探し訪ねた。

大航海時代と、先住猿人との交雑が同時に進み、やがて《涙滴大陸》から来た人々は千々に広がり拡散し、海岸伝いに徒歩で、また小舟で大河を遡り、より良い気候の広大な土地を求めて、北へ、また西へと進んでいった。

それぞれの土地に代を重ねて移り住み広がるうちに異なる言語と文化習俗に分かれ、かつて同郷同族であったことすら忘れ、あるいは現地の先住民と争い併呑しあい、《旧世界》での血のつながりの記憶は数千年の後には薄れて消えた。

(第3稿 3-1. 間隙時代)

3-1. 『間隙時代』の変遷。

それから数万年が経った。

《岩沙の大陸》の先住民であった石器人たちは《涙滴大陸》から持ち込まれた病や、また進んだ鉄器や炸薬や策略を用いた戦による版図争いに破れて滅び、伝説の中に《愚鈍な巨人族》として語られるのみの存在となった。

また漂着後もかたくなに「純血」を保ち続けた《涙滴大陸》貴族の者らは保身のため城塞を地底に築き身を潜め、外敵に対してその存在をひた隠しにしたため、《賢く剣呑な小人族》として後世に噂話を残すのみとなり、やはり多くの地においては記憶の彼方に没した。

一方で、早くから寛大かつ猥雑でおおらかな交種混血を進めていった部族は広く増え栄え、ある場合は人口過密による争いを避け、あるいはまたより豊かな獲物や肥沃で広大な新天地を求めて、ちりぢりに分かれ広がり、その間に言語も習俗も、また外見や信仰も、それぞれ離れていった。

《涙滴大陸》の伝承は、ただ《水に没した彼方の大陸》の寝物語としてのみ残った。

また、《槍を持ち天空の城から降り立ち人々を苦しめ使役した者ら》の記憶は畏れをもって語られ、《人を裁く異形の天界の神》という概念を形成するに至った。

また大洋の孤島や多島海では、漂着した少数の者らがそのまま血族婚を繰り返しながら、それぞれ独自の文化を築いた。

長い長い時が経った。

人々は散り散りになりつつもそれぞれの地で、後の世にまた《古代文明》と呼ばれるに至る長期王朝と建造物群を築き、旅をし版図を広げあって再び交易と混血の時代に至り、戦乱と略奪と平和と婚姻が交互に行なわれ、国々は統廃合され、文化文明は衝突し刺激しあった。

やがて《涙滴大陸》の忘れられた伝承が誤った方法で発掘され伝えられる頃、人々は複数の国家間をまきこむ大規模な戦乱を幾度か体験し、その悲惨に懲りて、世界大戦を収めるための協約が一時的には熱心に結ばれた。

その居住する世界を「惑星」と認識し、あらたに「ひとつ星」《ワナス》と名付け、人類の共存共栄圏と見なして、複数の異なる文化や言語や貧富や人種を背景とする人々が、限定的ながら共同の統治を試みる時代に至った。

しかし、偉大なる試みは試みとして試行錯誤のまま、齟齬と破綻に終わった。

3 - 2. 《第三次世界大戦》

なし崩しに拡大したとは言え、戦端がいつ開かれたのかが比較的容易に特定しうる第一次、第二次の《世界大戦》と比べ、「いつ」がその始まりであったと定めるかの定義が諸説紛糾し続けているのが《第三次》(大惨事)《世界大戦》と揶揄される戦乱の特徴であった。

超大国による小貧国へのささやかな資源収奪戦争に始まり、複雑に利害と建前の絡みあう周辺諸国をまきこみ、「使用期限切れ兵器の使い切り大廉売」と揶揄されるほどの武器商人の暗躍を経て、禁止された化学兵器と小型熱核爆弾の実戦投入を経て...

「全惑星上に平和なし。」とまで呼ばれた過酷な混戦は、

ある時、小天体の異常接近による激甚災害の頻発により、各国首都と全土と通信網とが壊滅状態となり、なしくずしの収束を余儀なくされた。

(第3稿 3-2. アルヴァ・タウレ)

3-3. 《アルヴァタウレ》と《黄金のイルレアーナ》

かつて《泥球》とも蔑称された惑星《ワナス》の衛星は《月》と呼ばれる1つであったが、ある時、2つに増えた。

《第二の月》と名づけられたそれは、まさに地球に衝突せんとする小惑星を《力ある者》らが寸前に回避回頭させ、むりやりその針路を曲げて衛星軌道に載せたものであった。

その作戦に参加した、主に《気波》力者からなる集団は、《アルヴァタウレ》の子どもたちと呼ばれた。

彼らと彼女らを率いた者は、自ら《黄金の》イルレアーナと名乗った。

金髪巻き毛に碧の瞳、豊満な胸と伸びやかな四肢をした、若く朗らかな女性であった。

彼らは《月Ⅱ》の領有を宣し、地球文明圏における最初の惑星外独立国家となった。

3-3. 《ポイント・P》

《アルヴァタウレ》の主導により、軌道上に独立交易都市《ポイント・P》が置かれた。

それは学究都市でもあり、地球上の国家間の思惑を一切無視した上で、「統一人類としての宇宙開拓を目指す」者らの最大教育機関と号した。

3-4. 【M. TOKI】プロジェクト。

その特筆すべき学生に、M. TOKIがいる。

日系人の彼はいわゆる「天才」と呼ばれ、在学中より数々の発明品と特許開発で富をなし、その巨大な財を投じて次々と販売用の私有コロニーを造った。

はじめは安全かつ快適な宇宙移住を求める超富豪らのために完全注文制作の豪邸コロニー《S I R O》シリーズを。

次には地上の汚染と戦乱から逃れて生存の自由を宇宙に求めた中間富裕層のために、プレタポルテタイプの《WAGAYA》シリーズを展開。

その販売収入をもって彼は「全生命救済」を掲げた巨大NGOを立ち上げた。

荒れる惑星上の沈む地表に取り残された人々と全生命体を無料で回収し、《DANCHI》シリーズと呼ばれる低資金・量産コロニー群に、次々と移住させた。

3-5. 《宇宙生活者連合》(コロニスツ)の成立

その《MTK》(もっとこい!)プロジェクトの結果、宇宙移住者の中で最も人数が多く、かつ技術力と組織性をもって政治的主流派となったのが日系人であった。

その中から豪田行(ゴウダ・ユク)が立った。

《スタンド・アロonz》と呼ばれた先住《独力宇宙移住者たち》をも糾合し、政策集団としてまとめあげて《宇宙生活者連合》(コロニスツ)を結成。

地表の各国に対し「対等以上」の地位を宣言し、全地表・即時(完全)停戦を要請し、その監視を《コロニスツ》最大の任とした。

これにより地表の戦乱は一旦収まったかに見えたが、自然環境の荒廃は、もはや止めよ

うがなかった。

3 - 6. 『最終戦争』

当初より共存協調の歩みを進めてきた《アルヴァタウレ》と《コロニスツ》の間で、初めはささいと思われる、小さな亀裂が起こった。

さらにそれを引き裂く形で、新勢力たる《青狼伝説団》（ブルーフズ）が台頭した。

彼らは「保護のための地球遺棄」を宣言し、全人類の即時宇宙移住を強要した。

従わぬ者はことごとく抹殺された。

その動きに抗ったのが《アルヴァタウレ》に属する「最後の」能力者と呼ばれる《キーヨ・エ・ミーニア》（日本名：磯原清）らであったが、抵抗虚しく、《ブルーフズ》による《地表環境強制修復作戦》は強行され、地表に残存していた全生命が一挙に喪われた。

この時、急遽再結成された《MTK》により、ぎりぎり救済された生存者の大半は、急造された宇宙船団で太陽系の内外へと新天地を求め旅立った。

《ムーンII》は移動して木星軌道に留まり、星系内の惑星間移住者も多く残った。

また、ごく一部の生命群は間一髪で地底都市に潜り、《ブルーフズ》の掃射を免れて、細々と生き残った。

これが、後の世に『地球最終戦争』と呼ばれた物語である。

(第3稿 3 - 7. (幕間劇 4))

(幕間劇 4)

3 - X 《落船山》計画

参照 <http://85358.diarynote.jp/201603111553281437/>

(第3稿 美麗天地)

4. 《美麗天地》の物語

4-0. 《先史文明》遺跡

そも美麗天地には《先人》の都市遺構あり。居住者なし。
《後人》らの到着時には、既に滅びていた、と言われる。

4-0-1. 《ユヴァの猿族》

《後人》らより《ユヴァの猿族》(ユヴァ・ニサ)と呼ばれる両性具有の者ら、惑星上各地にあり。

言葉を持たず文字を持たず、文化も持たぬと誤解され、当初は「類人猿なり」と記録さる。

後に《思念共有》(ニワンサー)の力と、独特の精神共生文化を有する、高度な知性体であったと知られる。

《先人》都市群の内紛滅亡時に争いを嫌い都を離れ野生に帰った人々の後裔であったと理解された頃には《後人》との交わりは断たれ、隠れた、または、滅びた、とされた。

わずかながら発生した混血児の子孫らのみが《後人》文化圏に遺され、後代に至ってはその特殊な才能を存続させるために少数民族として一所に集められ、隔離保護政策がとられた。

4-1. 《星船》墜落。

《美麗天地》の《後人》らは《星間を渡る船》から《墜ちた人々》の子孫である。
一説には《先人》らは、その落船の衝撃時に滅びた、とも言われる。

落船群の子孫らは、広く平坦な大陸部《カ・コウ》と、多島海《ラクシャ・インストラ》に分散して墜ち、それぞれに一から文化文明を築きなおした。

ために惑星初期文明は多文化・多言語・多民族混生の様相を呈し、とりわけ《多島海》地域においては、「海峡を渡る」は「異世界に分け入る」と同義の危険をはらんだ。

4 - 2. 初期《統一王国》の成立。

大陸部《カ・コウ》に強国が建ち、いくつかの衝突と戦乱を経て《多島海》地域が政治的に併呑され、惑星全土が《ひとつの王国》として緩やかに統合された。

4 - 2 - 1. 《ナシルの谷》

徹底的な職能別階級身分制社会を形成した《統一王国》の有力者階級の子弟らと、傑出した個別の能力のみをもって平民階級から抜擢された特待生らに対する為政者教育の場として、
《学都》（スレルナン）が創立された。

その中で一部の変わり者らが、続く内乱と民の疲弊をよそに権力闘争にあけくれる指導者層らのありように反発し、予定された官位を捨て、身分も性差もない「和合の暮らし」の理念を説いて、隠遁生活の村を創った。

女性王族として唯一「生涯不婚」を許された《別格公主》アリンシ・エランは創立者の一人であり、《村》に所領の一部を提供して《ナシルの谷》（エラン・ナシル）と名づけた。

後に惑星の正式名称となる《リスタルラーナ》は、この時、この《ナシルの谷》を指して、不婚公主の非公式な伴侶であった詩人アランナールが詠んだ即興歌、「リ・イス・スタル・アアル・ラーナ」（我らが麗しの天地よ！）が元であったと言われる。

理想と安寧の数代を経て《村》は安定的に発展し、共鳴する者が集まり人数も増えていったが、次なる内乱時代に至って野盗に襲われ火を放たれ、耕作地としては滅びたが、そ

の思想は長く残った。

4 - 3. 後期《統一王国》時代。

数百年にわたる内乱分裂時代を経て再び《統一王国》が建ち、新生平和政府の下、惑星全土がゆるやかに栄えた。

4 - 3 - 1. 《ユーヴェ・リー》

この時期、喪われた《ユヴァの猿族》らとの混血の子孫であり、いまや絶滅危惧種となった両性具有種《ユーヴェリー》の末裔に対する政府主導による「純血種保護政策」が採られ、居所と職業の選択ならびに婚姻出産の自由が制限された。

これにより幾つかの悲恋と悲劇が派生し、人々の関心を集めた。

種の保存の優先と、普遍的人権の擁護との対立を巡って、長らく論争が持たれた。

4 - 4. 探検と発掘

法令が普及し、科学技術が発展し、人々は生活に余裕を持ち、そして文化とくに歴史に興味に向いた。

《先人》遺跡の探検と並んで《星船》伝説の検証が行なわれ、史実とつきとめられ、ついに実物が発掘され、解析と研究が始まった。

4 - 5. 《大崩壊》

それは突然だったと言われる。

惑星上のほぼ全ての生態系と文化文明とが、一瞬にして滅びた。

発掘責任者は直後に悲嘆にくれて自死したため委細は不明であるが、後世に至って入力記録が確認された。

発掘隊は《星船》深部の《開かずの扉》をようやく開けることに成功し、そこで提示された《動く光文字》による、読めるようで意味の判然とはしない謎の問いかけに対して、豪胆で知られた発掘隊長は、ただひたすら、すべて「諾」の印を押し続けてみた。

らしい。
と推測されている。

《星船》を統括する人工脳は問いかけていた。

「現住惑星を設定初期値の居住可能型惑星に再改造しますか？」

「現住惑星上に存在している全生命の保全は必要ないですか？」

「この選択を押すと警告なしに惑星改造が始まります。諾か？」

専門の高等教育を受けた少数の発掘技術者と、いささか知見の怪しい多数の（自称）考古学者らと、その昼食を手配していた家族の者ら、そして天気の良い日にわざわざ地底の穴倉の遺跡探検と洒落こんだ物見遊山の好事家たちや恋人たち。わずか数千人のみを、船内に保護して...

《星船》は、埋まっていた地底の上の首都を瞬時に破壊して惑星重力圏外まで離脱し、即刻に「惑星改造」を開始した...

地表面は全て破砕され、微細粉末は分子原子のレベルで組み替えられ、「設定値ゼロ」の惑星表層改造が完了するまでの間、《星船》内でその報告詳細と映像を観続けることを強いられた人々は...

多くが嘆きのあまり狂死し、暴動が起き、荒れ、殺しあい...

《星船》が再び地表に降り立った時、生き残っていたのは、わずか数百人であった...

(第3稿 4-6. 再起と宇宙開発)

4-6. 再起と宇宙開発。

「再改造」された地表より深く、「先人遺跡」の地底都市内にいた人々も、原子分解の難を免れ、合流し、人類再起の試みが始まった。

この《天祖》組と《地祖》組の2者間における反目は後々に大きな禍根となったが、当初はさほどの問題とは思われていなかった。

人々は「惑星起源伝説の再来だ」と泣き笑いしながら力を合わせてよく働き、《星船》の自動機能を駆使して人工的な人口増大を図った。

やがて、急激に増え過ぎた人口は更なる新天地を求め、《星船》頭脳の提案に導かれるままに惑星間開発に乗り出した。

恒星間を押し渡り、近隣の小型惑星と大型衛星はことごとく「居住可能初期型」に改造されていった。

4-7. 好奇と忘却

器械により産み出され教育された《新しい人々》は次々と与えられる「新しいもの」をのみ喜び、「古いものを調べる」ことに極端な忌避を示した。

人種としての無意識集合体のトラウマが刻印されたのである。

好奇心を満たすためだけの教養教育は歓迎されたが、歴史や由来を知る・機構や理屈を学ぶなどの過程が必要とされる学問は、ことごとく無視され、敬遠された。

記録は残されず、交渉事もその場限りで、口約束は忘れられて当然のものであり、何らかの不足による争いが生じた場合は《船脳》に命じて、即座に新しい代替物が提供された。

数代を待たず星間移住した人々は母星の存在すら失念し、餓えも乾きも病も恐怖も、死すらも忘れた。加齢により死に近づいた人々は巧妙に隔離され、若い人々の眼中から消えた。

その数5000と概算される惑星と衛星と宙間人工基地に分かれ住んだ人々は、すべからず軽佻浮薄な好事家という文化的心理的な特徴と言語のみを共有し、常に新しい刺激を欲し、わずかでも人生に倦み傷つき、あるいはただ「退屈」しさえすれば、簡単に全世界を拒絶して閉じこもり、しばしば（軽率にも）衝動的な自死を選んだ。

4-8. 疑問と停滞

「...なにかが、おかしいのではないか...??」

やがて、そう呟いて立ち止る人々が現われ、この時に至って初めて「統一行政機構」が再結成され、有志による管理調整機関が組織され、やがて居住空間同士を繋いで統一し、「リスタルラーナ星間連盟」と名乗った。

意識的、かつ自発的に「行政」に関わる人々は、一般人からは禁忌と忌み嫌われる「記録」や「計数」を知りたがるために、しばしば「変人」と見なされ、「過去をほじくりかえして《大崩壊》の愚を再発したがりかねない、危険思想な人々」という認識すら、なされる場合があった。

浮薄で暴発しやすい人々の敵視から免れるべく「うまく立ち回る」処世術が、自主行政官たちには何より求められる資質となった。

4-9. 退屈と退廃

やがて多くの人々は、請えば次々と与えられる「新しいもの」が、実は「いつか観たものの焼き直し」に過ぎない単調な繰り返しだったと気づいてしまった。

ひたすら新奇を求めることにすらついに飽き、無気力無関心という心の病が拡がった。

うわついた恋愛ごっこや結婚や家族による幸福という幻想が激減し、出産や子育てという本能の行為がまったく魅力を持たなくなった。

自然出生人口は急速に激減の一途をたどった。

みずから「行政」に関わろうとする、生存欲の強い少数派の有志のみがこれを憂い、個人の希望ではなく「行政の意志」として、星船の自動機能から「人造人口維持機関」を独立させ、集団養育施設を工夫し、減り続ける自然人口に対する穴埋めの「育成人材」の割合を極端に増やし続けた。

このままでは社会それ自体が維持できず滅びる。

「為政者」たちは強い懸念と焦燥にかられながらも何らの打開策も見いだせず、「単調」な日々を無為に重ねた。

4 - X. 《テラザニア》発見。

最初期型「育成人材」の一人であり、星間探求者マリア、ティル・プラウディとオード夫妻の養子でもあったマリア、ソレル博士が、辺境星域を単独で探査中、星腕の暗黒影の彼方に別文明《テラザニア》を偶然発見し、ただちに調査を開始した。

この報告は極秘裏のうちに行政府上層会議にかけられ、激論の末、「人心衰退抑止のための好奇心起爆剤」との共通認識が形成され、大規模な「開国促進キャンペーン」が始まった。

(第3稿 5. 地球再生)

5 - 1. 《地球》再生。

悪名高い《杉谷好一》と《滅びの狼》(ブルーフズ)らの暴挙によって一旦は無生命の場と化した惑星《地球》であったが、ごく浅い急造の地下シェルターの耐用限界を迎えてわずか数十年後には地表に戻らざるを得なかった人々を端緒に、同じく戦乱による破損のため設計よりはるかに早く老朽化し始めたコロニー群からやむなく降下する人々も増え、より生存に適した惑星上の限られた土地を求めて争いあう、戦乱無法の世が始まった。

5 - 2. 統一の試み。

生き残ったわずかな人類らが愚かにも同じ歴史を繰り返そうするを憂い、地表の統一と平定を試みた者があまたある。

平和思想の教化と技術文明の統制により、北方文化圏を単独でまとめあげた《リーシェンソルト》と、

卓抜した人心掌握術と作戦指揮能力により、南西諸国を合議の場につかせ停戦講和に導いた《ルームのマリーアン》の、

同時期に立った二人の功績が、特に大きい。

しかし時いまだ至らず、再び世は乱れ、人心は荒廃した。

5 - 3. 《救い手》リースマリアル。

地下シェルターから発した《迎夢者たち》を率いて、ごく平凡な少女〈リースマリアル〉

が
世界統一に立った。

「戦わないし、殺さない。」

のみを掲げて彼らは歌舞音曲と色恋娯楽による希求平和思想の普及啓蒙し、ただ防護のためだけの卓越した技術開発をもって不休不退転の楽観的な活動を続け、各国軍事政権を幻惑し籠絡した。

5 - 4. 《草莽の民》併合。

救い手《リースマリアル》の没後も《迎夢者たち》により倦まず続けられた《進化論的積極平和主義》のもと、地表西方諸国が束ねられた後も、宗旨と世界観の異なる東方文化圏諸族は（言語や文化習俗をも含む）「統一の強制」を強く拒んだ。

強硬派による武装国境線封鎖論を融和するため派遣された西の全権大使ヨセフィア・アークタスに対する東の巫女王《サエム・ラン》降嫁という劇的な形で、その分裂は回避された。

5 - 5. 《テラザニア》成立。

数十年の時をかけて無力化され尽した各国と諸族の軍長たちは講和の席につかざるを得ず、紛糾の末、その会議の名は《地球系（全居住可能圏）星間統一連邦》と定められ、略称を《テラザニア》と決めた。

普遍的人権の絶対護持のみを唯一の統一点とし、その他あらゆる文化と価値観については多様性共存を、第二の旨とした。

5 - 6. 第一種接近遭遇。

ありとあらゆる細則について会議が常に紛糾を続け、幾度も幾度もすわ破断分裂再抗争かと危ぶまれる薄氷の平和のさなか、突如、「第一種接近遭遇」の報が最辺境星域からも

たらされた。

《リスタルラーナ星間連盟》からの、一方的かつ強引な開国の要請である。

短時間のうちに猜疑心に満ち溢れた撃退派と開国歓迎友好派の大激論となり、人心は千々に乱れ、巷に暴動があふれた。

《救い手リースマリアル》亡き後の「統一の象徴」と崇められていた《降嫁巫女》サエム・ランが、運悪く暴動に巻き込まれて重傷を負い危篤となった。

臨月であった胎内の第2子も生存が危ぶまれる...との速報に、全世界における暴動は一気に沈静化し、悲嘆と祈りの日々が変わった。

この時、リスタルラーナ全権大使ケティア、サークの脱法的な行動力と同行者ソレル博士の医療技術により危うく一命がとりとめられ、母子ともに無事生還。

爆発的な歓喜と世論の歓迎を得て、対リスタルラーナ開国と友好通商条約の即時締結が決定された。

これを記念して《地球圏統一暦》は《星暦》と改元された。

(第3稿 三界の物語)

6. 《三界》の物語

6-1. 友好通商時代

《地球》～《リスタルラーナ》の友好通商条約は短時日のうちに結ばれた。

急激に流入してくる優れた技術文明と生活物資の吸収に地球人いそむ一方、退屈しきっていたリスタルラーナは狂喜して、未知の文化文明についての新しい知見を貪欲に求めた。

地球人が「歴史と伝統」や「過去の教訓」という概念を大事にする点は、《美麗天地》世界にかつてない斬新さだと衝撃を与え、驚きとともに人々は飢えて「もっと沢山！ もっと！」と、文化娯楽産物の大量移入を希求した。

慌ただしく交換留学生が行き来し、急激な交流に伴って、事件や混乱も生じた。

6-2. 《三国史》時代の始まり

ほどなくして第3の異星文明圏《ジレイシャ＝アンガヴァス星間帝国》接近遭遇が発生し、三国間での開国条約交渉が始まった。

やがて、互いに自然交配が可能なほどに近似した遺伝子と外見と、いささかならず共通性のある言語文化的背景や概念を持ち、しかしながら歴史と年表をいくら逆算し、精査しても、一体「どこでどう分岐した同族」なのかが、時系列的に確定しがたい...という大きな矛盾と謎が発した。

ここから、3文明圏に共通して、空前の歴史と考古学のブームが興った。

(第3稿 7. ジースト)

7. 《ジースト》の物語

《ジースト》(複数形で「ジースタン」)とは
《ジースト・ゼネッタ》の略自称であり、

《ゼネッタ》(複数形で「ゼネラ」)とは
《ジレイシャ=アンガヴァス星間帝国》における
反政府組織、または「異端」「異分子」を意味する。

生まれながらの《気波》技術者として、
差別と弾圧を受け、後に自由を得た、
彼らの物語は、

別巻にて詳述される。

(第3稿 8. 統一銀河)

8. 《統一銀河》代

8 - 1. 《三千世界》時代

リスタルラーナの《行政府》や、地球圏（テラザニア）の《迎夢者たち》の統制力をはるかに超えて、《ジレイシャ＝アンガヴァス星間二重帝国》の反政府勢力である《ジースト・ゼネッタ》らから、さらに造反した者らが絡む地下犯罪組織が拡大した。

その対応への必要性から、早期に3界の各行政組織は連携化が進んだ。

やがて第一次～第三次の《2界》vs《ジ+ス》帝国戦役と、《ゼネッタ武装蜂起》（革命）による星間帝国の瓦解と再編成を経て、「長すぎた蜜月」とも呼ばれる治安混乱と文化低迷の千年期を過ごした後。

各界の有力者が話を進め、初代大統領としてエクウス・ライノーツを推すという話をまとめる形で、3界は公式に統合された。

通称《リス+テラ+ズ》とされたが、合わせて三千以上に及ぶ多種多様な文化的自治星系を内包していた為、地球系古語の美称《三千世界》（サンシ・エンタル）とも称された。

8 - 2. 《汎銀河協商》加盟

この時、3界統合と同時に「一銀河系一政体」の成立とみなされ、自動的に、越次元境通商統制機構である《汎銀河協商》より、初級加盟国として公式認定された。

これにより航時+越次元航行技術の輸入使用が許可されると共に、異星系や異次元系からの異なる外見と異なる生態系の知的または《非理的》生命体群が公式に訪問し、個体や集団の自由旅行が許可されることになった。

また、《リステラス》銀河人が望めば、他銀河系や異次元・高次元界へ訪問することも可能になった。

8-3. 《壁》の発生と世界の崩壊

しかしやがて《リステラス》創立時に唱えられた理想理念の世が乱れ、航時次元機を悪用する犯罪も多発した。取り締まりのため政府は監視体制を強化した。

この動きを「エセ平和と悪平等」と評して嫌った旧ジースト系市民らが大規模な抗議行動を起こし、次第に大規模な叛乱へと発展し、最後には銀河星雲の一端を斬り取る形で《壁》を築いた上で独立を宣した。

《リステラス》政府は当初これを「暫定自治領」という体裁で容認し積極的な和平案を提示して慰撫懐柔に努めたが、講和を悉く拒否され。

やがて「内乱制圧」の名目で銀河全軍出動の号令がかかる事態と相成った。

双方から多大な犠牲者が出て、怨恨と反目の亀裂はさらに深まり、両者の関係修復はもはや不可能とみなされた。

この時、自軍である《中央》上層部があまりにも杜撰かつ無様な作戦案を強行し、天文学的な死傷者を出して「味方殺し」と呼ばれた軍官僚の責任を問い、全銀河放映の場で公然と、

敗軍の将たるリエン・ドレングスンが叙勲の場に現われた国家元首を拳で殴り倒したという逸話は、歴史上あまりにも有名である。

8 - 4. 《協商》権の剥奪

その後、「知的良心派」と呼ばれたルー，ウェイファン博士らによる和平開国のための奔走も虚しく《壁》はさらに強化され続け、銀河文明圏の政治的な二分裂は決定的なものとなった。

全銀河の5分の4が残された《リステラス》領域では行政府の迷走ぶりに失意や反感を抱き意思表示が激化する市民らへの監視体制が強化され、粛清と隔離移動が進み、やがて遺伝的な近親者一族による寡占独裁化が進んだ。

《汎銀河協商》はこれを政治的退化とみなし、《協商》参加権ならびに航時航次元の自由の剥奪を宣言。

この後ただちに、異界生命体らは、(公式には全て) 退界し、鎖国とするに至った。

(第3稿 9. リズ～末法宇宙)

9. 《末法宇宙》の物語

9-1. 《エリスウェサ体制》

その一族の髪の色から《銀の時代》とも呼ばれた《エリスウェサ体制》が長く続いた。

《リステラス》行政府をそのまま専横する形で、選別遺伝子人工育成による徹底的な階級差別統治をおこなう管理監視社会は、抑圧された低中層の人々に対して《過去世界》への強い郷愁をかきたて、

《歴史愛好家》(イ・ロニナズ)と呼ばれる趣味と学術知識の共有交流集団が熱気を帯びて急速に膨らみ、やがてひとつの実質的政治的勢力を形成するものになった。

9-2. 《リ・ズ》から《外》へ。

喪われた理想の《過去世界》(パラ・ダイス)への憧憬と、息の詰まる現代社会のありようへの反発と絶望や厭世観のあまり、今や公的には違法となった航時機や次元移動容器の模造所持による他銀河星系や《他時間流異次元空間》への脱出、また最も重罪とされる《同時間軸過去世界》への逃亡移住が、秘かに、かつ公然たる、《自由希求市民》らにとってのムーブメントと化した。

9-3. 回収と懐柔

育成に手間のかかる「ある程度の個性と自我」を有した《高次脳機能強化階級》の労働種族ほど自由逃亡への希求率が激しかった為、人口と経済規模と治安の維持に危惧を覚えた《エリスウェサ》首脳陣《リ・ズ》は、逃散した人々の呼び戻しのために自発的帰還

者の不処罰と惑星の私有や星系自治権の認可など、《過去世代》の政治形態を模した大幅な（疑似的）規制緩和と妥協を告知した。

9-4. 惑星独立（革命）運動

許可された惑星私有の夢は数百年とまらずに破られ、混乱と悲嘆を産んだ。資金調達と許認可手続きの嵐という困難を乗り越え、苦勞して入植し開墾開拓が軌道に乗り始めた途端に、圧倒的な軍事力を背景とした《エリスウェサ》の通商管理権を楯に、交易の自由や自治権それ自体までもが制限される例が次々発生し、約定不履行に怒り心頭、「惑星政府の自主独立」を唱えて造反武装決起する政体が相次いだ。

9-5. 《航路遮断》と《星海王》

この《エリスウェサ》の管理権混乱に乗じて星間航路内に宇宙海賊や密輸組織による犯罪が頻発し、治安は暗黒時代と化した。

宇宙海賊らがあまりにも強大な勢力となり、各自治星軍ごときは蹴散らす勢いで跳梁跋扈したため、星間航路はずたずたに寸断されるに至り、銀河の端と端では物資も情報もまともに届かない、交流もなく存在すら忘れ知識も喪われ、また宇宙においては命も自由も保障されない、治安崩壊の末法末世となった。

この時代、暴走を極め獲物を奪い合い、互いに潰しあい始めた無法者らを束ね、力による恐怖支配という形で一定の縄張り秩序をもたらした、《星海王》または《星海女王》と呼ばれる僭称統治者らが出現した。

最も華やかであったのが《銀の闇》スィリーンと《黒い光輝》スェラの、二大女王時代である。

9-6. 《星間境界トンネル》

富裕層と商業資本勢力は宇宙海賊による航路崩壊を危惧して、早い時期より「危険な無

法宇宙を経由しないで済む、安全確実な新交易通路の整備を」と《エリスウェサ》に対して要求し、各企業は全力を挙げて、残された次元移動技術の知見を《汎銀河協商規約》に違反しない範囲内で応用し、やがて各星政府間を「宇宙に出ることなく内的に」繋ぐ、《星間境界トンネル》網を整備した。

富裕権力層は犯罪と汚濁の外界から逃れて《境界通廊》内都市の厚い擁壁の中に閉じこもり、危険な《外》へ出ることは絶えてなくなっていった。

9 - 7. 《末法宇宙》

下界民は《次元境界通廊内都市》の存在を噂のみでしか知らず、これを《穴ぐら》と蔑称し、いまや《穴倉もぐら》と化した独裁管理者どもが《現世》から姿を消したことを祝った。

監視と圧政からの自由のみを良しとして、混乱の末法世界を実力をもって生き残れる者だけが、自然交配によって子孫を残した。

遺伝子管理補修技術は《穴ぐら》の中に喪われ、宇宙線被曝と不衛生な環境にさらされた犯罪世界で無事に生まれ育つ子の数は目に見えて減り、星間人口の急減が進んだ。

9 - 8. 《天国と地獄》

《上内界》とも呼ばれる《セントラレリヤ》に逃れ移り住んだ為政者たちと富裕階層らは、

危険な《下外界》たる《アウトアンダルク》に「とり残された」下賤の者らをさげすみ、

もはや統治も交流も不可能、無意味と切り捨て、その存在すら忘れ去ろうと定めた。

《リステラス》統一銀河時代は、ここに終わりを告げた。

(第3稿 女神たちの転生課題)

X. 女神たちの転生課題

《上内界》たる《セントラレリア》人は知見と技術の進化を極め、やがて科学的探究の結果として《魂魄》の真実すらつきとめ、《現界》に生まれてありながら《転生管理委員会》と比肩すらしうる《下界》への影響力を持つに至った。

技術は深化を続け、社会は繁栄を極め、「望み叶わぬことはなき」理想世界と謳われたが、ここに至って為政者階層が最も危惧したものは、人心の「退屈」と「退嬰」による「退廃」崩壊の兆候が見え始めたことにあった。

《若神》らを育てる《学界》ではこの対策として《新内界》と呼ぶ《下次元仮想空間》の模擬創造を娯楽として嗜むことが奨励された。

ある年、試みに若い神々を四つに組分けての《模擬創造》競合実験が行われた。

技術的には問題なく進むと思われた。

しかしながら、想定外の事故が起き、すべてが崩壊し、《現界》にまで被害を及ぼした。

関係各位よりその理由を聴いて副学長は頭を抱え、

「全員、最初から転生輪廻をやり直して来い！」

異例の処罰に驚き、予定外の転生魂魄群の大量受け入れと世話を一方的に押し付けられた《転生管理委員会》からは巨大な苦情の嵐が相次ぎ、《上内界》と《委員会》の関係に齟齬が生じた。

学長は、ただ苦笑して、成り行きを見守った。

若い神々らの、人界に墜とされての苦勞と再転生の物語は、また別巻にて、詳細に語られるであろう...

「あらすじです。」(宇宙史)

... 一旦の完...

(第 2 稿)

(第 2 稿)

(第 2 稿)

0. 『上古神代』

0. 『上古神代』

0. 『上古神代』

0. 『上古神代』

始まりの場所。《センサリテヤ》。

時間・空間・重力と、奇蹟と生死と運命を、超越したところ。

また《究極の青》とも呼ばれる。

淡く青く濃く蒼く、また黄金と鬱金の、煌めく輝きに満ちた、夢幻の美宮の界。

治めるのは主宰母神〈マンマ・ワァガ〉。

「もはや姿を持たぬ神」。また、《遍自在神》とも呼ばれる。

0-0. 『四界神話』

〈マンマ・ワァガ〉は界卵を産み落とす。

ある時、その数は一度に四つであった。

これは手に余ると副主宰神〈レ・リナル〉はしばし思案し、

界卵を託すため、若き神々を呼集した。

神々の数も卵に合わせて四つ柱であった。

若き神々らはまた「いまだ姿ある神」とも呼ばれた。

0-1-1. 〈リースヒェン〉

「謹んで承ります」と、若き姉神〈リースヒェン〉は、膝を折って界卵を拝領した。

女神の姿は細く白く丈高く、薄い金の長い髪、瞳は水のごとく淡い白蒼であった。

0-1-2. 〈グアヒィギル〉

「慶んで引き受けよう！」と、若き兄神〈グアヒィギル〉は界卵を掌中におさめた。

男神の肌は黒曜石のように輝き、丈高く筋隆々たる美丈夫で、黒い巻き毛に黒い瞳であった。

0-1-3. 〈マリアヌ〉

「まあ、嬉しいわ！」

まだ幼き妹神〈マリアヌ〉は歓喜にふるえながら受け取った界卵を抱きしめた。

この少女神は豊かな緑の巻き毛に碧の瞳。四つ柱の中で最も若き神であった。

0-1-4. 〈ティアスラール〉

「無理です」

弟神〈ティアスラール〉は畏れて辞退した。

薄茶色の長い髪に薄茶色の大きな瞳の、少年神の姿であったと言われる。

0-2-1. 《エルス・ア・マーリア》

姉なる神〈リースヒェン〉は界の名を学都《エルス・ア・マーリア》と定めた。

智と探求を求める神々と、仙人と仙獣と聖なる精霊らが集い、《光なす内球の界》とも称した。

0-2-2. 《ボル・ド・ガスドム》

兄なる神〈グアヒギル〉は界の名を戦勝の都《ボル・ド・ガスドム》と定めた。

勝利と闘いと贖いの血とを求める荒々しき神々と、獣神と妖霊らが集い、《焰洞界》とも号した。

0-2-3. 《ダイ・レム・アールス》

妹なる神〈マリアヌ〉は界の名を《ダイ・レム・アールス》と名付けた。

技芸と舞楽を好む若き神々と神獣と仙獣と小さき精霊らが集い、《永遠無窮の大地》世界と呼んだ。

0-2-4. 《ティ・カーセル・ラース》

弟なる神〈ティアスラアル〉は再び固辞した。
ゆえにその界は大いなる空白、《ティ・カーセル・ラース》と呼ばれた。
界卵は孤独に育ち、魔神と半神と獣神ら妖霊らが放縦闊歩して、これを《泥球界》とあだ名した。

0-3-1. (諍い)

姉神リースヒェンは潔癖にして痛性。
血と騒乱を好むグアヒィギルらを忌避し、
ボル・ド・ガスドムの民を遠ざけた。

ボルドムの民らは

壮麗なる都エールス・ア・マーリアへの訪問を望むも、
これを「野蛮」とさげすみ、姉神は拒絶した。

0-3-2. (騒乱)

グアヒィギル怒りて天界の守護使を退け、

血刀ひっさげ乱入し、天の聖なる奥宮で、

むりやりに女神を穢した。

女神は怒りて自らの首を斬り落とし、

男神に首を投げつけて、

上神界へと姿を消した。

狂乱する男神の怒号のままに、
ボルドムの民はすべて天界に押し入り、

エルシャムの民を屠り、また穢した。

0 - 3 - 3. (侵害)

妹神マライアヌは大地界に逃げ来たる者らよりこれを聞き驚き恐れ、
急ぎ天界へ赴き兄神を諫めるも、

兄神は妹神をも打擲し罵り辱め、
ボルドムの民は勢いのままに

ダレマスの民をも襲い穢した。

0 - 3 - 4. (終焉)

これを聞き上神〈レ・リナル〉は驚き呆れ、
急ぎ大地界へ赴き暴れる神グアヒィギルを捕縛した。

マライアヌは消沈し、界を見捨てて〈センサリテヤ〉へと還った。

0 - 3 - 5. (凝視)

ティアスラァルはただその騒ぎを観ていた。

何もせず、ただ、静かに観ていた。

…

(幕間劇1) (ヤツリーダムの物語)

(幕間劇1)

(ヤツリーダムの物語)

1 - 0. 《ヤツリーダム》の物語。

1 - 0 - 0. 僭称する《神》。

主界神〈ティアスラアル〉は〈何もせぬ神〉と呼ばれた。
ために《泥球界》ティカーセラスは無法の世界であった。

咎める者がなきゆえ、外界より好き勝手に侵入した精霊たち妖霊たち魔霊にまた力ある
悪霊たちまでが、自由に往来し、放縦のかぎりをつくした。

しかしながら咎める者なき無秩序。

それはむしろつまらなかった。
放霊たちは法なき世界に、すぐ飽いた。

やがて、最も力ある者、妖しく光り輝く者が、

自らを〈太陽神〉と号し、

より弱き者らを従え脅かした。

「力ある者の専横こそが、唯一の法である。」と

〈太陽神〉は宣した。

これが《泥球界》での初めの掟となった。

1 - 0 - 1. 「ヤ・ツリーダム！」

この〈太陽神〉はいまだ霊格低き「姿持つ者」であった。

肉性を好み、暴政を嗜虐した。

ある時、気まぐれにひとつの小さな水の精に目をとめ犯した。

泣き叫びながら犯された水の精はやがて一群れの卵を産んだ。

卵から生まれ出た仔らは

細長く小さく平たいぶかっこうな体に

平たい四ツ足と、

太く短い尾を持つ姿で、

肌の色は茶まだらで醜く、

弱く、歯も牙も、爪さえ持たず、

のたのたと無様に地を這うばかりであった。

「ヤ・ツリーダム！」（なんと醜い！）

〈太陽神〉はひとこと吐き捨てると、哭きむせぶ水の精をも見捨てて去った。

それがこの仔らの最初の名前となった。

1 - 0 - 2. 〈水霊母〉

水の精は困り果てた。

幾万となく生まれた卵塊から孵ったばかりの醜き仔らが、
まもなく次々と苦しみもがき、死に絶え始めたのである。

母は水の精であるがゆえに

泥水の海の底の底の底で卵を産み護り孵したが、

生まれ出た仔らは空の者である太陽神に似て、

水の中に長く居ることはかなわぬ存在だった。

母は大慌てで口から大いなる泡を吐き、

泡の中に生き残った幾千かの仔らをくるんで、

大慌てで海の上の、空とのあわいにまで持ち上げた。

ところが仔らは水面に浮いて泳ぐことさえ長くは出来ぬのだった。

次々ともがき溺れ死ぬ様を見た母は

大慌てでまた海の底の底へ戻り、

泣きむせび平伏嘆願して弱き仲間らのかぎりある力を全て借り集め、

海の底の底から泥と岩をこねあげ押し上げて突き固め、

なんとか仔らを載せる小さな陸の揺籃を造った。

この激しい愛の働きをもって名もなく小さな水の精は〈力ある水の霊〉となり、

これより後〈水霊母〉と呼ばれた。

1 - 0 - 3. 剥奪。

ところが水の中からようやくに出た生き残りの幾百かの仔らは、

空気のなかでは肌が乾いて、ひび割れて次々に死んでしまうのだった。

地の上にあがれぬ母は水辺から身を乗り出して涙を落とし、

弱き小さき仔らの肌を護った。

眠る暇さえ惜しんだ。

それを遠くから見かねた父なる〈太陽神〉が再び襲い来た。

「来い。それよりはマシな子種を仕込んでやろうぞ！」

母は哭き叫びながら力づくで連れ去られた。

飢え乾く幾十匹かの仔らだけが残された。

1 - 0 - 4. 〈いちばん強い〉と〈いちばん大きい〉

空は無慈悲に乾き、天は無慈悲に照らした。

みるみるうちに乾いてゆく泥溜まりの底の底に

とり残された仔らは身を寄せ合った。

〈いちばん大きい〉と呼ばれる《グエップラップ》は仲間たちと声をかけあった。

「小さいやつを中に入れてやれ。

弱いやつは真ん中に入れてやれ！」

干乾びてゆく浅い泥水の底の底を掘り、

小さく弱いものらを中に沈めて、

大きいものらは交代で外に出て、

奪われた母の代わりに短い尾の先で、

弱いものたちの背なや頭に、

ぼしゃぼしゃと必死で泥をかけやるのであった。

やがて、もう自分たち全てが入れるほどの

泥の大きさは残っていないと気付いた

〈いちばん強い〉《グエップラップ》が言った。

「おれは、母を取り戻せぬか、見て来る。」

沼辺のふちの高い崖を乗り越え、

固く乾いた岩漠の果てに、

彼は姿を消した。

〈いちばん大きい〉兄弟《グェップロップ》は、その大いなる姿で

小さく弱いものたちに日陰を造ってやりながら、

ただ、去ってゆく《グェップラップ》を、哀しく見送るしかなかった。

1 - 0 - 5. 〈いちばん弱い〉と〈いちばん小さい〉

泣き叫び嫌がり逆らう《水霊母》をふたたび無理矢理に犯して二度目の卵を孕ませてはみたが、

怒り狂い威嚇し拒絶するだけの女霊をただいたぶるにも飽いて、

媚びへつらう美しい笑顔の他の女精たちに、

〈太陽神〉はすぐに気をうつした。

そのすきをついて逃げ出した母が、ようやく戻った。その時。

累々と固まる干乾びた《ヤツリーダム》たちの

無惨な遺骸の山のかたすみ、

かろうじて生きて残されていたのは、

息絶えた姉らによって真ん中に入れられ、

むくろの山の日陰に護られていた、

〈いちばん小さい〉と〈いちばん弱い〉の

末の弟妹だけだった。

二匹は喪われた兄姉の遺骸の肉をはみ、

血膿まじりの泥をのみ、

もはや流す涙すらなく、

ただかろうじて震えながら息をしていた。

その眼は虚無だった。

母は哭き伏しのたうち、ただひたすらに〈太陽神〉を怨み、呪った。

1 - 0 - 6 . 月女神

その母の血涙の慟哭の、

世の涯てまでもと叫ぶ悲嘆を聞き及び、

ようやくに上つ界より正義なる神〈レリナルディアム〉が

低く醜き《泥球界》まで降りて来たった。

白銀に光る長い髪に銀に光る鋭い瞳の伶俐なる上界女神は宣した。

「〈太陽神〉と名乗る者。

おのが身分をわきまえるがよい。

この界のあるじは〈なにもせぬ神〉ティアスラアル。ただ一柱のみである。」

これがこの界における二度目の掟となった。

僭称神とその眷属らは怖じ恐れ、捨て科白を吐き捨てると、疾く去った。

残されたのは水霊母が二度目に産んだ、哀れな卵塊の仔らのみであった。

この仔らはやはり海に泳げず空も飛べない、

父神に似ず翼なき姿の、

二足二腕のみの不具の姿であったが、

すでに心を病んだ水霊母は、

この仔らをかえりみることはなかった。

1 - 0 - 7. 〈慨嘆の一族〉

〈いちばん小さい〉 ガップレップと

〈いちばん弱い〉 ガップヤップの弟妹は、

哀れにおもった上界月女神にまもられて

《涙滴大陸》の湿気た沼地の

穏やかな淵に棲まうこととなり、

やがて夫婦となり卵を産んだ。

生まれた新しい仔らの産声にひかれて

姿をあらわした《水霊母》は、

喪われた古き仔らに生き写しの姿に魂を傷め、

「ヤ・チーダム！」（なんて可哀想な！）と叫んだ。

それが彼らの二度目の名前となった。

哀しみのあまり姿を隠した《水霊母》は

深く深く海の苦しみの底の底に身を沈めたまま、

長く長く仔らの安寧を願いながらも、

天と太陽を呪い続けた。

(1. 涙滴大陸) (前期)

1. 《涙滴大陸》(前期)

1 - 1. 《 神殺し 》。

1 - 1. 《 神殺し 》。

1 - 1 - 0. 《 名すら無き者 》。

長い長い時が経った。

《 水霊母 》が《 太陽神 》から、むりやりに産まされた二度目の卵群は

誰からも省みられることなく、

ただ地の熱に蒸されて孵り、

幼いうちからたがいを憎み、

競い争い、食らいあって育ち、

強者が弱者を喰らい、

また犯して産ませ、

産み捨てられ、

いたぶられ、逃げのびて育った。

彼らを呼ぶ者として他になく、

彼ら自身もみずから名乗ることがなかった。

1 - 1 - 1. 《 袋を持つもの 》

そうして無知にして無慈悲のままに、何億代かが過ぎた。

生き延びおおせ、

勝ち残るために、

より強くあるために、

彼らは平たく這いつくばる四ツ足と鱗の姿から、

長く伸びた四肢と首とくちばしと、

軽く暖かく空気をはらむ、

みごとな羽毛もつ姿に変化した。

より速く逃げ、より確実にわが仔を護るため、

女雌たちは腹に卵や袋を持った。

1 - 1 - 2. 《コ》族。

生きのこるために彼らは学習し、

やがて記憶と知識を持った。

始まりの言葉が生まれ、

語り継がれる物語が生まれた。

仲間と敵の見分けかた、

群れることと護りあうこと、

時に応じて切り捨て裏切り

見捨てて生きのびることを

学んだ。

その中で最強の者らはやがて自らの仲間を《コ》族と名付けた。
産み増えて地に満ちたが、心は常に孤独であった。

1 - 1 - 3. 《神》。

まえの長老のまた前の長老の、そのまた前の前の大昔の長老が、

この世の始まりには《神》というものがあつたと語り伝えた。

そのような伝え語りすら記憶の闇に隠れるころ、

《コ》族の〈へ〉という者がおとぎ話を笑い飛ばした。

「カミなぞおらぬ。この世の最強は、ただ《コ》族のみ。」

1 - 1 - 4. 《天雷》

その時、天が轟き揺らめき、地が裂け割れて、崩れた。

人々は怖じ恐れて〈へ〉の不敬を罵倒した。

やがて天地が冷え、冷たい雨が〈冷たく白い沙〉に変わった。

草木は枯れ、虫は死に、

人々は飢え、獣も餓えた。

1 - 1 - 5. 《魔竜》

〈冷たき白き沙〉に埋もれた山中より、火のように熱く焦げた息を吐く、餓えた巨大な魔竜が現われた。

次々に《コ》族を襲い、弱った子どもや孕んだ雌らを喰らった。

人々は噂した。

「あの恐ろしき魔のモノこそが、《神》というものに違いない！」

1-1-6. 《神殺し》

〈へ〉は嗤い飛ばした。

槍を研ぎ、仕掛け弓を張り巡らし、怯える同族らを叱り飛ばして、ただひと群れで《神》を襲った。

死闘の末、《神》は斃された。

斃した神の肉を喰らって、《コ》族は冬を乗り越えた。

1-1-7. 《神殺しの智王》

あまたの同族を率い、策略の限りを用いて《神》と呼ばれた巨大な魔竜をみごと斃した〈へ〉は、

その勲しを讃えて、《神殺しのコ族の王》〈コヘウ・ケレンテン〉と呼ばれた。

それまでは強き者らが無秩序に争いあっていた《コ》族の

全てを束ねる者となり、

やがて手足となる眷属が生まれ、

王族と貴族と呼ばれ、

下つ奴婢民どもと

上つ上長族との、

区別がうまれた。

1 - 2. 《碧葉国》の物語。

1 - 2. 《碧葉国》の物語。

1 - 2 - 1. 災厄の巨平石。

《神殺し》たちが数を増やし、

姿を増やし、

海辺の磯浜から山上の岩漠にまで、

棲む領域を広げに広げたある時。

天空を斜めに切り裂き、燃えさかる《巨平石》が墜ちてきた。

巨大なる平石は燃えさかりながら斜めに墜ちて、

荒れ狂う北の海面に当たり、

墜ちた勢いのままに斜めに二度、三度と

斜めに飛び跳ね、斜めに進んだ。

《大いなる壁のごとき大波》が起こり、

浜辺ちかくに棲息していた《神殺し》たちと

その眷属とその敵とを

全て一息に飲み干した。

飛び跳ねつくした平石は大陸の山壁に当たって止まり、

大いなる熱を発して大地を溶かした。

その後へ幾度も幾度も、

大波が襲い掛かった。

1 - 2 - 2. 大寒冷。

波は久しく荒れ狂い、

空は暗く荒れ狂い、

長く寒い時代が続き、

《神殺し》たちは溺れ、餓え、

冷えて凍えて次々とほとんど死んだ。

生き残る者は互いにあい喰み、強い者だけが残った。

ようやくに天が開き陽光が戻った時、《神殺し》たちには雌や子どもが残らなかった。

そしてようやく地が冷め乾き、埋もれた平石の周りが冷えた時。

そこから出て来た者たちには、なにゆえか、雄男たちがほとんどいなかった。

1 - 2 - 3. 《胎卵》の一族。

大いなる燃える平石を《ほしのふね》と呼ぶ美しい雌たちは、《神殺し》たちと取引をした。

交わって、卵仔を産もう。産んだ卵を温めて、孵そう。

無事に生まれた2つまでは《神殺し》に与えよう。

そして3つからは、われら《ほしのふね》の跡継ぎに貰う。と…。

墜ちてきた雌たちは《神殺し》の大いなる雄らと交わり、

その不可思議な胎の袋で大いなる一つの卵を護り孵した。

《神殺し》たちは奇異なる姿の美しい雌たちと喜んで交わり、

産み育ての母から新たなる知恵を授けられた賢い仔を得て、

更に喜び、

やがて再び増えて栄えた。

《ほしのふね》の子孫らも、やがて地に増え、広がり続けた。

1 - 2 - 4. 《碧葉の樹》の国。

《ほしのふね》の子孫たちは雄も雌も産まれてやがて地に増え、

《ほしのふね》の落ちた周りには大いなる異種の樹林が育った。

子孫たちはその円環の森を《碧葉樹》と呼び、

自らの領土を《碧葉国》と号した。

1 - 2 - 5. 王国の乱立。

《神殺し》たちはそれまで

《国》という知恵がなかった。

土地に壁を築き、土地に名をつけることが瞬く間に流行り、

次々に《国》が開かれた。

やがて地が動き、気候が動き、

冷えて冷えて棲みづらくなった土地から

《胎から仔を産む者たち》が、

新たに移動してきた。

《国》の数は増え、

《民》の種類も増え、

それぞれに合い争い、

強き者らが、栄えた。

1 - 3. 《 谷の一族 》

1 - 3. 《 谷の一族 》

1 - 3 - 1. 横穴の民。

ある時、《神殺し》たちは近寄ることもなき《実のならぬ臭い大樹の森》の広大な谷間に、いちどきに大勢の《異形の民》らがやってきた。

二本の足、二本の腕だが、尾はなく、顔は平たく、

牙もなく、毛皮もなくて、羽もなかった。

雌たちは股の穴から

血まみれの赤い仔を産んだ。

とにかく数が多かった。

彼らは海の向うではなく、天からでもなく、

涙滴大陸の《背骨の山》の《谷の穴》から、

「湧いて出て来た」と称した。

1 - 3 - 2. 教えの《谷》。

彼らはそのまま《実のならぬ臭くて痛い葉の》大樹の谷に棲みつきたいと申し出たので、

《神殺し》の王たちは嘲笑して許可した。

「虫も獣も果実もない土地ぞ。

その人数で、なにを食する？」

《穴から湧いた民》たちは喜んで地を掘って虫を捜し出し、

草を編んで川を漁り、

底に隠れた魚を獲った。

木片を操って火を起し、火炎で炙った食物を供した。

《神殺し》たちは射し出された珍奇な食物の旨さに仰天して涎を流し、

その知恵と技に感嘆し、狡猾に教えを請うた。

「谷の土地は貸してやる。代わりに、その技を伝授せよ。」

それより後《谷》の一族は《教えの民》とも呼ばれ、あらゆる知恵と技術を授けるために、

《神殺し》たちが棲む熱く湿った地方へと、入れ替わりで訪れ、旅をした。

1 - 3 - 3. 凍死と養子。

やがて再び天地が動き、山は育ち、時は移り、命も次々に死んで生まれて、代々の入れ替わりが進んだ。

ある時、短いが深刻な《大寒冷》が訪れ、《卵》の者らは雌と跡継ぎを全て失った。

《胎から仔を産む者》だけが残った。

《卵》の者らは胎仔の一族に代価を払って養子を迎え、それぞれの言葉や領土を継ぐ者として育てた。

《谷》の一族から尾のない幼い子どもを族長候補として迎える国々も多く、やがて大陸の南の大半は、

《股の穴から赤子を産む者》らで満ちた。

1 - 3 - 4. 《帝国》の成立。

《谷》の者らは無用の争いを好まぬ民だったが、幼くして《神殺し》らの養子とされた者はすぐに戦上手となることを望まれた。

《谷》に生まれ《神殺し》の家族となり戦に慣れて育った者らは、狡知と叡智を合せ持ち、姦計を巡らし権勢を競い合い、軍を造り国を盗り、領土を増やし、差配する役人らを育てた。

やがて、血にまみれた《王のなかの王》が勝ち残り、その国を《帝国》と号した。

《谷》の一族は無用の流血を畏れ、《帝国》に臣従を誓った。

1 - 4. 《月女神》信仰。

1 - 4. 《月女神》信仰。

1 - 4 - 1. 《時の横穴》

ふたたび地は動き、山は育ち、陸は広がり、草木は増えて生え広がった。

《碧葉国》と《神殺し》の帝国は、主に気候の温暖な大陸の北西海湾に栄え、冷涼で急峻な南央の山地には《谷》からの数少ない移住者と、ひとまとめに《他族》と呼ばれる者らのみが、まばらに棲んでいた。

ある時、塞がれていたはずの《谷の横穴》に、女が墜ちて戻らぬ事変があった。

これを憂えた《月女神レリナル》が天より降り来たりて《穴》をふさいだ。

「地が動き、蓋がずれた。」と。

1 - 4 - 2. 《月女神殿》

《時の横穴》をふさぎ見張りの兵を配し堅牢なる銀の城砦を築き、そこにそのまま月女神はとどまった。

《谷》の人々はこれを《月女神殿》と呼び、畏れ敬った。

《神殺し》たる帝国はこれを心苦く思ったが、版図より遠き山塊のことゆえ、あえて捨て置いた。

1 - 4 - 3. 《月女神》信仰。

それまで《神》を持たずにいた《涙滴大陸》の者らは、これを奇に思い、畏れ敬った。

《月女神》はまた「すべての雌と女たちの守護者」であるとされ、子宝や良縁や、また離縁を望む者らが続々と遠方より訪れた。

1 - 4 - 4. 女剣士（ルワ・ヘルマ）と女騎士（ルワ・ブラダ）。

《月神殿》を詣でる者らを護るために《女剣士》と《女騎士》がうまれた。

それまで《帝国》においては雌と女は泣きながら男と雄に犯され泣きながら使役され、嘆きの子守唄を低く呟きながら子や仔を産み育てる為だけの存在であって決してそれ以上ではなかったが、《女剣士》と《女騎士》らが力と智慧を得て男や雄たちと互角に闘い得ることを見て、人々の心が変わった。

月女神の守護を受けた女は、すべての男が定める現界の掟から解き放たれて自由となる、という不文律が創られた。

初代の《女騎士》の名をリ・リィ＝カタ・ナンという。

奇しくも、《時の横穴》に墜ちて死んだ者の娘で、《谷》と《碧葉》の血を併せ持ち、金の長い髪に金の瞳の、白真珠の肌の細身の姿であった。

1 - 4 - 5. 巫女戦士。

《谷》と《帝国》の契約に基づいて《献納戦士》とされた女が、その戒律を反故にするため月女神に誓いを立て、初の《巫女戦士》となった。

名をハユンのアマラーサ。黒髪黒瞳、褐色の肌、男勝りの大柄であったと伝える。

《大旱魃》に際して《谷》の戦士らと共に奪われた《水娘神》を救い出し、涙滴大陸を餓えから護った。

1 - 4 - 6. 月女神、去る。

大地鳴動し、大山脈が隆起し街道は崩落した。

「足で歩む者は二度と再び《時の横穴》には近づけぬ。」と、《銀月女神》は地界を去った。

女神が残した《ミトラの教え》（三親の法）だけが残り、長く広く帝国に流布された。

1 - 5. 《白鱗の民》と《谷》の終焉。

1 - 5. 《白鱗の民》と《谷》の終焉。

1 - 5 - 1. 《白鱗の民》

いつの頃からか帝国の海辺に《白い鱗の一族》が棲みつき、次第に増え始めた。

彼らは一見柔弱温和であり、海産物と陸産物との交易で穏やかに富を得ていたが、その内心は妬心に満ち狡知に長け、《谷》と《帝国》と《碧葉国》との協和と繁栄を妬み羨み、《涙滴大陸》の全土をも《海族》の版図とせんと、秘かに企んでいた。

1 - 5 - 2. 《谷》の焼失。

ある代、皇帝崩御の報と共に生じた帝家後継争いの混乱の機に乗じ、一斉に攻め入られて帝城帝都は悉く灰燼に帰し滅ぼされ、《谷》もまた乾季に大火が放たれて、炎上し滅した。

1 - 5 - 3. 《帝国》の復仇。

《白鱗》の呪師が放たれ、激しい雨風が続き、《涙滴大陸》の全土は泥濘と共に押し寄せた軍勢に吞まれかけたが、帝家唯一の生き残りであった妾腹の皇子ミアルドが地方公らを糾して軍をたて応戦し、これをよく防いだ。

1 - 5 - 4. 流病と回生。

やがて《白鱗》と《海族》のみが死に至る流行り病が溢れて、あっけなく騒乱は収まった。

復仇の皇子ミアルドが新帝家を築き《再興帝》と呼ばれた。

これより帝国は危難に備えて《石の街道》と《石の守護都》の網目を築きあげ、大陸全土を統一帝軍にて掌握し、直接の版図とするに至った。

《再興帝》の妻妾にして初代の女宰相となったディアレスト・ディアが、これを良く補佐したと伝えられる。

(幕間劇 2)

(幕間劇 2)

『ヤツリーダムの物語 2』

ある大嵐の翌朝、大湖沼地帯の岸辺の泥だまりのほとりで、群れからはぐれたらしい四ツ足の仔が1匹、母を求めてか、しきりと鳴き泣きしているのを、通りすがりの二本足の女が聴きとめた。

孕んだ胎を抱えた女は異族とはいえ迷子の幼生を見過ごせず、さりとしてあたりを見渡しても、春の大雨の後の増水の、さらにとどめの嵐で、目の届かぎり一面の水びたし。迷仔がもとした沼が何処であったかなど、とても見分けられそうにない。

しかたなく女は片手でひょいとその仔をつかむとすたすと自分の家まで戻り、一番大きなたらいに庭先の流れの泥水を満たしてその仔を放ち、ときおりは日当たりで体を干して休めるようにと板きれを斜めに渡して、泥一面の岸辺にいて水草も埋もれて食餌もとれなかったろうと、屋根から吊るして増水から護ってあった保存食の中から、海藻の干したものを少しばかり水でもどしてはいはいと喰わせてやった。

がつがつと喰らったその仔は腹がくちくになるとようやくに鳴きやんで、「...あんにゃ〜！」と、それまでとは少しようすの違うお礼のような声をあげ、やがて安心したのかたらいの泥水の中から板きれに半分ほど身を乗り出した格好で、くうくうと寝入ってしまった。

女は微笑んで、増水がひいてその仔が一匹でも生きられるようになるまでは預かるつもりで毎日まいにち、干した草やら刻んだ水草やらをせっせと用意しては口元に運んでやった。

やがて月満ちて女は子を産んだ。動けぬあいだは親族や近在の者が入れ替わりでやってきては二本足の赤子の元気そうな乳の呑みっぷりを誉め、手の放せぬ女に代わって四ツ足の仔にもよしよしと撫でてやり餌をやり、泥水をよいしょと替えてやっては帰っていった。また訪れた。

やがて女は不自由なく出歩けるようになると、まだまだ軽い乳飲み児をくるみ布でよいしょと背負い、もうずいぶん大きく重く育った四ツ足をえっこらさと抱え上げて、増水のひいたもとの大河のほとりにまでうんさこらさと運んでやった。

ところが四ツ足はみいと哭き、厭がって女から離れなかった。

「えんにゃー！ えんにゃー！...えんにゃー.....ッ！」

...褐色の平たい四ツ足のはぐれ仔が、どうやら自分のことを実の母と思いこんでしまったらしいと気がついて、女は苦笑してため息をつき、またまたえっこらさと抱え上げてうんうんと家まで戻り、今度は家の前の小さい沼川に、ほいっと四ツ足をはなしてやった。

「もう盥の中では狭いだらう。ここならいつでも逢えるよ？」

聞き分けたのか、四ツ足はおとなしく泥沼のなかへ泳ぎこんでいって、少し嬉しそうにまだ短い尾でばしゃりと水を叩いた。

その晩、おそらくその仔の母なのであろう人の背ほどの大きな雌の四ツ足と、その族長であろうか大きな大きな、家の屋根を越すほどの大いなる老いた四ツ足が、そろりと女の家の前に泳ぎ来て、声をそろえて「あんにゃ〜！」と鳴きながら、長い首を折ってかしげた。

大いなる二匹の去った後には二本足の喜ぶ水底の光る石や貝殻や、船から落ちたのだろう古びた金貨が、こんもりと小山に積まれてあった。

仔は時おりは太い河まで出て親や一族らと遊んで帰ってくるようだったが、ほとんどいつもは女の家の前において、食餌は自分で探して水草を摂るようになったが、朝に夕に、陽が昇れば「あにゃー！」と鳴いて女を起こしに来るし、陽が沈めば「おにゃー！」と鳴いて、女におやすみの挨拶をしに来るのであった。

女はしばらく考えて、二本足の息子には《双葉》と名付け、四ツ足の息子には、《四つ葉》と名づけた。

《双葉》は《四つ葉》ほどには成長が速くなかったが、人間の子らしい緩さで元気にすくすく育ち、やがてすこしでも目を離すと四つ這いでどンドン遠くまで行ってしまふようになった。

ふつうなら一瞬でも気を抜けないところだったが、なにしろ水辺に墜ちれば《四つ葉》がすぐに岸边まで押し上げてくれるし、屋根から落ちそうになれば全力で叫んで知らせてくれるして、女はずいぶんらくをさせてもらった。

「... こういうのも、乳兄弟って言うのかねえ... ?」

いつでも一緒の小さい一人と大きな一匹を楽しく眺めて、近在の者らはずいぶん笑いあうのであった。

やがてどんな年寄りでも覚えがないほどの大雨と大水が続いた。

噂では《白鱗》の魚人族がカとミの秘術を使い、二本足が治める帝国を滅ぼさんとして大陸大地の水没を企んでいるとのことだった。

誰もなすすべもなく沈みゆく畑を前におろおろし、流される家を後に必死で逃げた。

女たちの集落も水に呑まれた。

泣き叫びながら人間たちもまた激しい渦にまかれ、もがきながら泥に沈んだ。

悲鳴は天に響いた。

「…………… うんにゃぎゃぎゃ～！ ぎゃぎゃっ！ ぎゅっ！ ぎゅ～～ッ……！！」

それまで誰も聞いたことがないほど大きな大きな大いなる絶叫が、《双葉》と母を背に乗せて必死に泳ぐ《四つ葉》の喉から溢れた。

二度、三度と続き、それは天と地に轟いた。

「…………… うげろーーーーーっぶ！…」

はるか遠くから、また反対側のかなたからも、応える叫びが次々にあがった。

物凄い速さでいくつもの小津波が近づいてきた。

波と見えたが、それは物凄い速さで泳ぎ寄ってきた、たくさんの、たくさんの、《四つ葉》の水中の仲間であった。

仲間たちは《四つ葉》を育てた村の人間たちを一人残らず背に載せて、泳いで泳いで泳いで泳いで、ようやくに、まだ乾いていた残りの小さな島地を探して上に載せては、また次の人間を探しに潜った。

「…………… やっ、ちだも……！」（なんて御親切に！）

救われた二本足たちは涙を流して感謝し伏し拝んだ。

それからは《ヤチダモ》が、四ツ足たちの新しい名前になった。

やがて大水は引き《白鱗》たちは流行り病であっけなく滅んだと噂が届き、人々は新しい乾いた土地を探して水辺に村と畑を開いた。

《双葉》と《四つ葉》は仲良しのまま元気に育ち、それぞれに嫁をもらって子を産み育て、二本足と四ツ足の一族同士も互いに仲良しのまま、未長く行き来し栄えた。

この話を伝え聞いた近在の内陸の者、また遠方の山郷の者らは、縁起を担ごうとあたりの四ツ足の仲間に声をかけ食餌を貢ぎ、また像を刻んで、護符として身につけ家に据えるなどの習わしができ、次第に広がっていった。

1. 《淚滴大陸》(後期)

1. 《淚滴大陸》(後期)

1. 《涙滴大陸》（後期）（1 - 6 ~ 10.）

1. 《涙滴大陸》（後期）

1 - 6. 《石の帝国》

《竜種》とその養子たちを含む《谷》の血筋の者たちが大陸各地に散在混住し、その漠然とした権力関係の集合体を《帝国版図》とみなしていた時代を《竜の帝国》と称し、《白鱗の乱》後の再興時代は区別して《石の帝国》と呼び、また《石造都道の大陸帝国》とも美称した。

1 - 7. 《谷》の民のその後。

焼失した広大な《谷》から避難し外の世界へ逃れた一族は、ごく一部を除いて《森》へ戻ることはなく、生き残った《竜尾族》と増え続ける未開の《二つ足》に生きのびるための叡智と技術を伝え、水源の管理法や嵐や地震にも耐える丈夫な家の造りかたを教え、集落と都邑を結ぶ街道群の造営と石造りの広大な都市建築と、それらを管理する機能的で有能な官僚機構を築いた。

1 - 8. 身分の分割。

やがて《尾無しの本二足》たちはふたつに分かれた。

定住し権力を握り、他族を使役して驕慢に振る舞うもの達と、流浪して旅に生きることを愛し、技芸や交易をなりわいとして自由と平等を良しとする者たちである。

やがて権力を持つ者たちは持つことを拒否する者たちを憎むに至り、武力をもって蹴散らし、弾圧した。

二つ足も他族も、民草は貧富と階層とに細かく区分され、自由は制限され、奴隷が売買された。

1 - 9. 四民平等。

やがて小藩都ズードリブルより女の領主が立ち、女と男との富の平等を訴えた。

まもなく遼原の火のごとく万人の自由と富と身分の四民平等を説く教えが広がった。

《救世主》サラ・タイスの世直しが行なわれ、帝都《石》には新しく《四民議会》が開かれた。

出自によらぬ本人の選択と努力による職業や富が約束され、世は栄え、交易は安定した。

1 - 10. 大陸の滅亡。

突然、天空に大いなる《銀闇黒の丸い幻影》が現われた。

地の人々はそれを《黒の太陽》と呼び怖れた。

その巨大な円盤は、宙に浮かぶ都市であった。

降り来たる人々は、それを《光より速い船》と呼んだ。

船人たちは《石の帝国》の男を殺し、女を犯し、子どもを産ましめ、その子を奪った。

船にいた女たちが病により絶滅した故である。

帝国の男たちは戦いを挑み、殺され、女たちは泣き叫び逃げ惑った。

一計を案じて《光より速く飛ぶ》に潜りこんだ、勇敢な子どもらがあった。

内部で暴れた。

巨大なる円盤の船は傾き...落ちた。

大地はありえぬほどに鳴動し、炎上し、開いた大穴からは溶けた大地が溢れ出し、すべてのものが焼けて崩れた。

その跡に、生き残ったわずかな人々の頭上に、はるか天高くそびえる巨大な津波が襲い掛かった。

その波の引いた後、大地は泥と氷に沈み、はるか山脈よりも高く深く降り積んだ雪に埋もれた。

これが《水の仔の島》として生まれ、増え広がりやがて《涙滴大陸》と呼ばれ、やがては輝かしき《石の帝国》の版図であった、〈アタ・ルアンタイス〉の、最期の姿であった。

(幕間劇 3)

(幕間劇 3)

ヤツリーダムの物語 3

天が裂け大地が割れた。

大津波が沸き上がり、火の玉が森や街に降り落ちた。

飛べる虫と鳥と魚たちは一斉に逃げ出し、泳げる獣たちは海に飛び込んだ。

二本足のうち知恵や権力のある者は我先に港に駆けつけた。

金や暴力にものを言わせて我が身と我が財宝と、我が一族のうちでも特に気に入った者だけを乗せて残りの不要な者は蹴散らし、悲鳴と怒号と哀願とを無視して、船を急ぎ外海に走らせた。

中には貧しい者らに必死としがみつかれて転覆させられる船、恨まれ火を放たれて港口を塞いで炎上する船、まさに阿鼻叫喚のちまたであった。

岸辺からはるか離れた低い野山にも情け容赦なく頭上から襲いかかり洗い流す激しい河津波に吞まれた二本足たちは、なすすべもなく水に溺れた。

その時、〈ヤチダモ〉たちが一斉に天に声を放った。

ありとあらゆる平たい四ツ足のヤチダモの仲間たち、大きい者も小さい者も、尾のある者も四つ鱗でかく者も、みな急ぎ駆け、泳ぎ寄り、溺れる二本足たちとその他の陸の者たちを、あとう限りにその背に載せた。

荒れ狂う波を掻き分け押し分け、息もつかずに泳ぎに泳いだ。

荒れ狂う火と水に沈み行く《涙滴大陸》から彼方の《未知の大陸》群へと、泳いで泳いで泳いで泳いだが、浪は荒く高く、水は冷たく、時には硬く凍りついて皮膚を打ちかき裂き破り、二本足らを載せたままでは水に潜り餌をとることも、背中の乾いた皮膚に水をかけることすらも出来ず、多くのヤチダモたちは半ばで力尽き、その屍を漂流する舟として、なおも人々を運んだ。

飢え渴いた二本足らは哭きながら死んだヤチダモの干からびた背中の皮を剥いで喰い、脂を燃やして肉を喰い、屍の舟が底の皮しか残らなくなる頃、

ようやくに、潮に流されてはるかな砂の大陸へと流され着いた。

これが《涙滴大陸》の最期の物語であり、《岩沙の大陸》の物語の始まりなのであった。

…『涙滴大陸』終わり。

2. 《大地世界》の物語

2. 《大地世界》の物語

《大地世界》の物語 (※)

(※ 別巻にて詳述。)

3. 《地球》の終わりの物語

3. 《地球》の終わりの物語

2. 『地球の終わりの物語』 2 - 0. 支族たち。

2. 『地球の終わりの物語』

2 - 0. 支族たち。

そのようにして、かつて《涙滴大陸》に栄えた《石の帝国》の二本足たちはごくわずかののみが生き残り、さらに少ない人数ずつに分かれて島々や大陸に散り散りになった。

命からがら飢え乾いて傷つきながら、身ひとつで未知の岸辺に辿り着き、そのまま未知の獣やその地の野蛮で巨大な毛むくじゃらの二本足らに喰われて終わった者や、また道の病に斃れる者たちも多かった。

懸命な努力と偶然の幸運に護られて、生き延びえたごく少数の者らは、やがてだんだんに増え、かつて《涙滴大陸》に現われた《谷》の人々が《竜尾の一族》らから《教えの民》と呼ばれた時代さながら、《岩沙の大陸》の毛の濃い巨大で愚鈍な二本足らを教導し、また使役して、数百年の後には再び各地に《石の都》を築いた。

かつて焼失した《谷》の一族はその後《石の帝国》後期においては十または十二と言われる職能集団《色の支族》に別れ、各地を流浪し、また分散して生活していたが、そのうち造船と交易に携わっていた《青の一族》は、《涙滴大陸》の滅びにあたって最も生存率が高く、漂着した《岩沙の大陸》の南岸に強堅な石造都邑の拠点を築くと同時に、あとう限り巨大な帆船を次々に造りあげて、他の地に流された仲間達を探し訪れた。

大航海時代と、類猿巨人たちとの交雑が同時に進み、やがて人々は千々にに広がり拡散し、海岸伝いに、また大河を遡り、より良い気候の広大な土地を求めて、北へ西へと進んでいった。

それぞれの土地に代々を重ねて移り住むうちに、異なる言語と文化習俗に別れ、かつて同郷であったことすら忘れ、あるいは現地の先住民族と争い併呑しあい、数千年の後には旧大陸でのつながりの記憶は薄れて消えた。

2 - 1. 『間隙時代』の変遷。

2 - 1. 『間隙時代』の変遷。

それから数万年が経った。

《岩沙の大陸》の先住民であった石器人たちは《涙滴大陸》から持ち込まれた病や、また進んだ鉄器や炸薬や策略を用いた戦による版図争いに破れて滅び、伝説の中に《愚鈍な巨人族》として語られるのみの存在となった。

また漂着した後もかたくなに「純血」を保ち続けた《涙滴大陸》貴族の者らは保身のために城塞を地底に築き身を潜らせ存在をひた隠しにしたため、《賢く剣呑な小人族》としてのみ後世に記憶を残し、やはり多くの地においては伝説の彼方に没した。

一方で、早くから寛大かつ猥雑でおおらかな交種混血を進めていった部族は末永く広く栄え、あるいは人口過密による争いを避け、あるいはより豊かな獲物や肥沃で広大な新天地を求めて、ちりぢりに増え広がり、その間に言語も習俗も、また外見や信仰も、それぞれ離れていった。

《涙滴大陸》の歴史と悲劇の物語はただ《水に没した彼方の大陸》の伝説としてのみ残った。

また、《槍を持ち天空の城から降り立って人々を使役し苦しめた者ら》は、畏れをもって語られ、人を裁く《天の神》という概念を形成するに至った。

また大洋の孤島や多島海では、漂着した少数の者らがそのまま血族婚を繰り返しながら、それぞれ独自の文化を築いた。

長い長い時が経った。

人々は散り散りになりつつもそれぞれの地で再び後の世には《古代文明》と呼ばれるに至る長期間の王朝文化と建造物群とを築き、旅をし戦路を広げて再び交易と混血の時代に至り、戦と略奪と和平と婚姻が交互に行なわれ、国々は統廃合され、文化文明は衝突し刺激しあった。

やがて《涙滴大陸》の忘れられた伝承が再び誤った方法で発掘される頃、人々は複数の国家間をまきこむ大規模な戦乱を数度体験し、その悲惨に懲りて、世界大戦を収めるための協約が一時的には進んで結ばれた。

惑星をあらたに《ひとつの星》〈ワナース〉と名付け、人類共有の共存共栄圏として、複数の文化や言語や人種を背景とする人々が、限定的ながら共同の統治を試みる時代に至った。

しかし、偉大なる試みは試みとして試行錯誤のまま、齟齬と破綻に終わった。

2 - 8. 『最終戦争』

2 - 3. 《アルヴァタウレ》と《黄金のイルレアーナ》

そもそも惑星《泥球》とも呼ばれる《ワナース》の衛星は《月》と呼ばれる1つだけであつたが、ある時、2つに増えた。

《第二の月》と名づけられたそれは、まさに地球に衝突せんとする小惑星を《力ある者》らがより集いて寸前に回避回頭させ、むりやりにそのベクトルを曲げて衛星軌道に乗せたものであつた。

その行為を行った、主に念動能力者らからなる集団はその後《アルヴァタウレ》と名乗る。

それを呼びかけ、また率いた者は《黄金のイルレアーナ》であつた。

金髪巻き毛に碧の瞳、豊満な胸と伸びやかな四肢をした美しく朗らかな女性であつたと言われる。

彼らは《ムーンII》の領有を宣し、地球文明圏における最初の宇宙空間独立国家となる。

2 - 6. 【M. TOKI】プロジェクト。

《アルヴァタウレ》の主導と出資により、軌道上に独立衛星都市《ポイント・P》が置かれた。それは学究都市でもあり、地球圏の国家間の思惑を一切無視して、「統一人類としての宇宙開発を目指す」者らの集団であつた。

特筆すべき学生に、M.T. OKIがいる。

日系人の彼は在学中より数々の発明品と特許で巨富をなし、その私財を投じて次々と新造コロニーを、始めは地表からの脱出を求める富豪らのためのオーダーメイドの独立邸宅都市として造り、次には戦乱を逃れて生存を宇宙に求める中間富裕移民層のためにブレタポルテタイプの《DAN-CHI》シリーズを展開した。

その販売収入をもって彼は「全生命救済」を掲げた巨大NGOを立ち上げ、荒れる地球の沈む地表に取り残された人々を無料で回収し、《WAGAYA》シリーズと呼ばれる低資金量産コロニーに移住させていった。

2-7. 《宇宙生活者連合》(コロニスツ)の成立

その《M.T.O.K.》プロジェクトの結果、宇宙移住者の中で人数と技術力をもって主流派となったのが日系人であった。

その中から豪田行(ゴウダ・ユク)が立った。

《スタンド・アローンズ》と呼ばれた独力宇宙移住者たちを糾合し、政治集団としてまとめあげ、《宇宙生活者連合》(コロニスツ)と名乗り、地表の各国に対し「対等以上」の地位を宣言し、全地表即時停戦を監視することを自らの任とした。

地表の戦乱は一旦収まったかに見えたが、自然環境の荒廃は、もはや止めようがなかった。

2-8. 『最終戦争』

当初より共存の歩みを進めてきた《アルヴァタウレ》と《コロニスツ》の間で、初めはささいと思われる小さな分裂が起こった。

さらにそれをひき裂いて、新勢力たる《青狼伝説団》(ブルーフズ)が台頭した。

彼らは「保護のための地球遺棄」を宣言し、全人類の即時宇宙移住を強要した。

従わぬ者はことごとく抹殺され、それに抗ったのが《アルヴァタウレ》に属する最後の能力者と呼ばれる《キーヨ・エ＝ミーニア》(日本名：磯原清)らであったが、《ブルーフズ》による「地表復旧作戦」は強行され、地上に残存していた全生命が喪われた。

この時、救済された全生命の大半は、急造された宇宙船団で太陽系内外へと旅立った。

《ムーンII》は移動して木星軌道に留まり、星系内惑星間移住者も多く残った。

また、ごく一部の生命群は地底都市に潜り、《ブルーフズ》の掃射を免れて、細々とのみ生き残った。

これが、『地球最終戦争』と、後の世に語られる物語の大筋である。

4. 《美麗天地》の物語

4. 《美麗天地》の物語

4. 美麗天地の物語

4. 美麗天地の物語

4／0. 《先史文明》遺跡

そも美麗天地には《先人》の都市遺構あり。居住者なし。

《後人》らの到着時には、既に滅びていた、と言われる。

4／0／1. 《ユヴァの猿族》

《後人》らより《ユヴァの猿族》(ユヴァ・ニサ)と呼ばれる両性具有の者ら惑星上各地にあり。

言葉を持たず、文字を持たず、文化も持たぬと誤解され、当初は「類人猿なり。」と記録さる。

後に《思念共有》(ニワンサー)の力と精神文化を有する高度な知性体であったことが知られる。

《先人》都市群の内紛滅亡時に争いを嫌い都を離れ野生に帰った人々の後裔と、理解された頃には《後人》との交わりは断たれ、隠れた、または、滅びた、とされた。

わずかながら発生した混血児の子孫らのみが《後人》文化圏に遺され、後代に至ってはその特殊な才能を存続させるために少数民族として一所に集められ、隔離保護政策がとられた。

4／1. 《星船》墜落。

《美麗天地》の《後人》らは《星間を渡る船》から墜ちた人々の子孫である。

一説には《先人》らはその落船の衝撃時に滅びた、とも言われる。

落船群の子孫らは広く平坦な大陸部《カ・コウ》と、多島海《ラクシャ・インストラ》に分散して墜ち、それぞれに0またはマイナスから文化文明を築きなおして再発展した。

ために初期文明は多文化多民族多言語混在の様相を呈し、とりわけ多島海地域においては「海峡を渡る」は「異世界に分け入る」と同義の危険をはらんだ。

4 / 2. 初期《統一王国》の成立。

大陸部に強国が建ち、いくつかの衝突と戦乱を経て多島海地域が政治的に併呑され、惑星全土が《ひとつの王国》として緩やかに統合された。

4 / 2 / 1. 《ナシルの谷》

徹底的な階級身分制社会を形成した《統一王国》の有力者階級の子弟らと、能力のみをもって平民階級から抜擢された英明な者らの為政者教育の場として《学都》(スレルナン)が制定された。

その中で一部の変わり者らが、続く内乱と権力闘争にあけくれる指導者層らのありように反発し、予定された官位を捨て、身分も性差もない「和合の暮らし」の理念を説いて、隠遁生活の村を創った。

皇族として唯一「生涯不婚」を許された別格公主〈アリンシ・エラン〉の所領をそのまま恒久割譲され、《ナシルの谷》(エラン・ナシル)と名乗った。

後に惑星の正式名称となる《リスタルラーナ》は、この時、《ナシルの谷》を指して、不婚公主の非公式な伴侶でもあった詩人が村祭で詠った「リ・イス・スタル・アアルラーナ」(我らが麗しの天地よ!)が元であったと言われる。

理想と安寧の数代を経て、次なる内乱時代に野盗に襲われ火を放たれ、農地としては滅

びたが、その思想は長く残った。

4 / 3. 後期《統一王国》時代。

数百年にわたる内乱分裂時代を経て再び《統一王国》が建ち、神聖平和政府の下、惑星全土がゆるやかに栄えた。

この時期、《ユヴァの猿族》らとの混血の子孫であり、いまや絶滅危惧種となった両性具有種《ユーヴェリー》の末裔らの「純血保護政策」が採られ、居所と職業の選択ならびに婚姻出産の自由が制限された。

種の保存の優先と普遍的人権の擁護を巡って、長らく論争が持たれた。

4 - 4. 《大崩壊》

文化と法令が普及し、科学技術が発展し、人々は生活に余裕を持ち、そして歴史に興味に向いた。

《先人》遺跡の探検と並んで《星船》伝説の検証が行なわれ、史実であったことがつきとめられ、ついに実物が発掘され、解析と研究が始まった

そしてそれは突然だったと言われる。

惑星上のほぼ全ての生態系と文化文明とが、一瞬にして滅びた。

発掘責任者は直後に悲嘆にくれて自死したため詳細はつまびらかでないが、後世に往時の入力記録が確認された。

発掘隊は《星船》深部の《開かずの扉》をようやくこじ開けることに成功し、そこで提示された《動く光文字》による、読めるようで意味の判然とはしない謎の問いかけに対して、豪胆で知られた発掘隊長は、ただひたすら、すべて「諾」の印を押し続けてみた。らしい。と推測されている。

《星船》を統括する人工脳は問いかけていた。

「現住惑星を設定初期値の居住可能型惑星に再改造しますか？」

「現住惑星上に存在している全生命の保全は必要ないですか？」

「この選択を押すと警告なしに惑星改造が始まります。諸か？」

専門の高等教育を受けた少数の発掘技術者と、いささか知見の怪しい多数の（自称）考古学者らと、その昼食を手配していた家族の者ら、そして天気の良い日にわざわざ地底の穴倉の遺跡探検と洒落こんだ物見遊山の好事家たちや恋人たち。わずかに数千人のみを船内に保護して...

《星船》は、埋まっていた地底の上の首都を瞬時に破壊して惑星重力圏外まで離脱し、即刻に「惑星改造」を開始した...

地表面は全て破碎され、微細粉末は分子原子のレベルで組み替えられ、「設定値ゼロ」の惑星表層改造が完了するまでの間、《星船》内でその報告詳細と映像を観続けることを強いられた人々は...

多くが嘆きのあまり狂死し、暴動が起き、荒れ、殺しあい...

《星船》が再び地表に降り立った時、生き残っていたのは、わずかに数百人足らずであった...

4. 《リスタルラーナ星間連盟》の設立。

4-5. 再起と宇宙開発。

「再改造」された地表より深く、「先人遺跡」の地底都市内にいた人々も原子分解の難を免れ、合流し、人類再起の試みが始まった。

この《天祖》組と《地祖》組の2者間における反目は後々に大きな禍根となったが、当初はさほどの問題とは思われていなかった。

人々は「惑星起源伝説の再来だ」と泣き笑いしながら力を合わせてよく働き、《星船》の自動機能を駆使して人工的な人口増大を図り、《星船》の提案に導かれるままに惑星間開発に乗り出し、急激に増えた人口は更なる新天地を求め、恒星間を押し渡り、近隣の小型惑星と大型衛星は、ことごとく「居住可能型」に改造されていった。

4-2. 好奇と衝動。

器械により産み出され教育された新しい人々は次々と与えられる「新しいもの」をのみ喜び、「古いものを調べる」ことに極端な忌避を示した。人種としての無意識集合体のトラウマが刻印されたのである。

知的好奇心を満たすためだけの教養教育は歓迎されたが、歴史や由来を知る・学ぶなどの行為を必要とされる学問の需要はことごとく無視され、敬遠された。

記録は残されず、交渉事もその場限りで、口約束は忘れられ破られても当然のものであり、何らかの不足による争いが生じれば《船脳》に命じて、即座に新しい代替物が提供された。

4 - 3. 忘却と忘失。

数代を待たず、星間移住した人々は母星の存在すら失念し、餓えも乾きも病も恐怖も死も忘れた。(加齢により死に近づいた人々は巧妙に隔離され、若い人々の眼中から消えた)。

その数5000と概算される惑星と衛星と宙間航路上の人工基地等に分かれ住んだ人々は、すべからず軽佻浮薄な好事家、という文化的心理的な特徴と共通言語のみを共有し、常に新しい刺激を欲し、わずかでも人生に倦み傷つき、あるいはただ退屈しさえすれば、簡単に全世界を拒絶し、しばしば(軽率にも)衝動的な自死を選んだ。

4 - 4. 疑問と停滞。

「...なにかが、おかしいのではないか...??」

やがて、そう呟いて立ち止る人々が現われ、この時に至って初めて「統一行政機構」が再結成され、有志による管理調整機関が組織され、やがて居住空間同士を繋いで統一し、「リスタルラーナ星間連盟」と名乗った。

意識的、かつ自主的に「行政」に関わる人々は、一般人からは「禁忌」と忌み嫌われる「記録」や「計数」を知りたがるため、しばしば「変人」と見なされ、「過去をほじくりかえして《大崩壊》の愚を再発したがりがねない、危険思想な人々」という認識すら、なされる場合があった。

浮薄で暴発しやすい人々の敵視から免れるべく「うまく立ち回る」処世術が、自主行政官たちには何より求められる資質となった。

4 - 5. 退屈と退廃

やがて多くの人々は、請えば次々と与えられる「新しいもの」が、実は「いつか観たものの焼き直し」に過ぎない繰り返しだと気づいてしまった。

ひたすら新奇を求めることにすらすら飽き、無気力無関心という心の病が拡がった。

うわついた恋愛ごっこの哀歓や結婚や家族による幸福という幻想が激減し、出産や子育てという本能の行為がまったく魅力を持たなくなった。

自然出生人口は急速に激減の一途をたどった。

みずから「行政」に関わろうとする、生存欲の強い少数派の有志のみがこれを憂い、個人の希望ではなく「行政の意志」として、星船の自動機能から「人造人口維持機関」を独立させ、集団養育施設を工夫し、減り続ける自然人口に対する穴埋めの「育成人材」の割合を極端に増やし続けた。

4 - 6. 《テラザニア》発見。

そんななか、最初期型「育成人材」の一人であり星間探求学者マリア、ティルとオード夫妻の養子でもあったマリア、ソレル博士が、辺境星域探査中、星腕の暗黒影の彼方に別文明《テラザニア》を発見し、ただちに調査を開始した。

この情報は極秘裏のうちに「行政府」上部会議にかけられ、激論の末「文化衰退抑止のための好奇心起爆剤」との共通認識が形成され、大規模な「開国促進キャンペーン」が始まった。

5. 地球再統一

5. 《地球》再統一

5 - 1. 《地球》再統一。

5 - 1. 《地球》再生。

杉谷好一と《滅びの狼》(ブルーフズ)らの暴挙によって一旦は無生命の場と化した惑星《地球》であったが、ごく浅い急造地下シェルターの耐用限界を迎えてわずか数十年後には地表に戻らざるを得なかった人々を端緒に、同じく戦乱で破損し設計よりはるかに早く老朽化した移住衛星からやむなく降下する人々も増え始め、より生存に適した土地を求めて争いあう戦乱無法の世が始まった。

5 - 2. 統一の試み。

生き残ったわずかな人類らが愚かにも同じ歴史を繰り返そうするを憂い、地表の統一と平定を試みた者がいくたりかある。

平和思想の教化と技術文明の統制により北方文化圏をまとめあげた〈リーシェンソルト〉と、

卓抜した人心掌握術と作戦指揮能力により南西諸国を停戦講和に導いた《リームのマリーアン》の、

功績が特に大きい。

しかし時いまだ至らず、再び世は乱れ、人心は荒廃した。

5 - 3. 《救い手》リースマリアル。

《迎夢者たち》を率いて、ごく平凡な少女〈リースマリアル〉が世界統一に立った。

「戦わないし、殺さない。」

のみを掲げて彼らは歌舞音曲と色恋娯楽による希求平和思想の普及啓蒙と、ただ防護のためだけの卓越した技術開発をもって不休の活動を続け、各国軍事政権を幻惑し籠絡した。

5 - 4. 《草莽の民》併合。

〈リースマリアル〉の没後も《迎夢者たち》により倦まず続けられた《進化論的積極平和主義》のもと、地表西方諸国が束ねられた後も、宗旨と世界観の異なる東方文化圏諸族は（言語や文化習俗をも含む）「統一の強制」を強く拒んだ。

強硬派による武装国境線封鎖論を融和するため派遣された西の全権大使ヨセフィア・アークタスに対する、東の巫女王サエム・ランの降嫁、という劇的な形で、その分裂は回避された。

5 - 5. 《テラザニア》成立。

数十年の時をかけて無力化され尽した各国と諸族の軍長たちは講和の席につかざるを得ず、紛糾の末、その会議の名は《地球系（全居住可能圏）星間統一連邦》と定められ、略称を《テラザニア》と決めた。

普遍的人権の絶対護持のみを唯一の統一点とし、その他あらゆる文化と価値観については多様性共存を、第二の旨とした。

5 - 6. 第一種接近遭遇。

ありとあらゆる細則について会議が常に紛糾を続け、幾度も幾度もすわ破断分裂再抗争かと危ぶまれる薄氷の平和のさなか、突如、「第一種接近遭遇」の報が最辺境星域からもたらされた。

《リスタルラーナ星間連盟》からの、一方的かつ強引な開国の要請である。

短時間のうちに猜疑心に満ち溢れた撃退派と開国歓迎友好派の大激論となり、人心は千々に乱れ、巷に暴動があふれた。

《救い手リースマリアル》亡き後の「統一の象徴」と崇められていた《降嫁巫女》サエム・ランが、運悪く暴動に巻き込まれて重傷を負い危篤となった。

胎内の第2子も危ぶまれる...との速報に触れて全世界における暴動は一気に沈静化し、悲嘆と祈りの時刻に変わった。

この時、リスタルラーナ全権大使ケティア、サークの行動力と同行者ソレル博士の医療技術により危うく一命がとりとめられ、母子ともに無事生還。

世論の爆発的な歓喜と歓迎を得て、対リスタルラーナ開国と友好通商条約の締結が決定された。

これを記念して《地球圏統一暦》は《星暦0年》と改元された。

6. 《三界》の物語

6. 《三界》の物語

6. 《三界》の物語。

6-1. 友好通商時代。

《地球》～《リスタルラーナ》の友好通商条約は短時日のうちに結ばれた。

地球人が新たに急激に流入してくる技術文明と生活物資の吸収にいそしむ一方で、退屈しきっていたリスタルラーナ人種は狂喜して、未知の文化文明についての知見を求めた。

地球人が「歴史と伝統」や「過去の教訓」という概念を大事にする点は《美麗天地》世界にかつてない斬新さと感じられ、驚きとともに人々は食欲に「もっと沢山！」と文化娯楽産物の移入を期待した。

慌ただしく交換留学生が行き来し、急激な交流に伴って、事件や混乱も生じた。

6-2. 《三界》交渉。

ほどなくして第3の異星文明圏《ジレイシャ＝アンガヴァス星間帝国》との遭遇があり、三国間での開国条約交渉が始まった。

やがて、互いに自然交配が可能なほどに近似した遺伝子と外見と、いささかならず共通性のある文化的背景や概念を持ち、しかしながら歴史と年表をいくら逆算し精査しても、一体どこでどう分岐した「同族」なのかが、いまひとつ確定しがたい...という大きな謎が発した。

ここから、3文明圏には空前の歴史と考古学のブームが興った。

7. 《ジースト》の物語

7. 《ジースト》の物語

- THEAST the BEAST -

(※)

(※ 別巻にて詳述。)

8. 《統一銀河》の物語

8

《統一銀河》の物語

...《エリスウェサ体制》...

8. 《統一銀河》代。

8 - 1. 《三千世界》時代

リスタルラーナの《行政府》や、地球圏（テラザニア）の《迎夢者たち》の統制力をはるかに超えて、《ジレイシャ＝アンガヴァス星間二重帝国》の反政府勢力である《ジースト・ゼネッタ》らから、さらに造反した者らが絡む地下犯罪組織が拡大し、その対応への必要性から、早期に3界の各行政組織は連携化が進んだ。

やがて第一次～第三次の《2界》vs《ジナス》帝国戦役と、《ゼネッタ武装革命》による帝国の瓦解と再編成を経て、「長すぎた蜜月」とも呼ばれる治安混乱と文化低迷の千年期を過ごした後。

各界の有力者が話を進め、初代大統領としてエクウス・ライノーツを推すという話をまとめる形で、3界は公式に統合された。

通称《リス+テラ+ズ》と呼ばれたが、おのおの千以上に及ぶ多種多様な文化的自治星系を内包していたことから、地球系古語の美称から《三千世界》（サンシエンタル）とも称された。

8 - 2. 《汎銀河協商》加盟。

この時、3界統合と同時に「一銀河系一政体」の成立とみなされ、自動的に、越次元通商統制機構である《汎銀河協商》より、初級加盟国として初めて認定された。

それにより航時+航次元技術の移入が許可され、異星系や異次元系からの異なる外見と異なる生態系からの知的または非理知的生命体群が公式に訪問し、個体や集団の自由旅行が許可されることになった。

また、《リステラス》銀河人が望めば他銀河系や異次元・高次元界へ訪問することも可能になった。

8-3. 《壁》の発生と世界の崩壊。

しかしやがて《リステラス》創立時に唱えられた理想理念の世が乱れ、航時次元機を悪用する犯罪も多発した。取り締まりのため政府は監視体制を強化した。

この動きを「似非平和と悪平等」だと看做して嫌った旧ジースト系市民が大規模な抗議行動を起こし、次第に大規模な叛乱へと発展し、最後には銀河星雲の一端を斬り取る形で《壁》を築き独立を宣した。

《リステラス》政府は当初これを「暫定自治領」という体裁で容認し積極的な和平案を提示して慰撫懐柔に努めたが、講和を悉く拒否され、やがて「内乱制圧」の名目で銀河全軍出動の号令がかかる事態と相成った。

双方から多大な犠牲者が出て怨恨と反目の亀裂はさらに深まり、両者の関係修復はもはや不可能とみなされた。

この時、《中央》側のあまりにも杜撰かつ無様な作戦案を強行し、天文学的な死傷者を出して自軍を敗走せしめ「味方殺し」と呼ばれた軍官僚らが敗走責任を問われ、全銀河放映の場で公然と、敗軍の将リエン・ドレングスンから殴り倒されたという逸話は、歴史上あまりにも有名である。

その後、「知的良心派」と呼ばれたルー・ウェイファン博士らによる和平のための奔走も虚しく《壁》はさらに強化され続け、銀河文明圏の政治的な二分裂は決定的なものとなった。

全銀河のうち5分の4が残された《リステラス》領域では行政府の迷走ぶりに失意や反感を抱き意思表示する市民らへの監視体制が強化され、粛清と隔離移動が進み、やがて遺伝的な近親者一族による寡占独裁化が進んだ。

《汎銀河協商》はこれを政治的退化とみなし、《協商》参加権ならびに航時航次元の自由の剥奪を宣言。

この後ただちに、異界生命体らは公式には全て退界するに至った。

9. 《リズ》から外へ。

9. 《リズ》から外へ。

...《末法宇宙》の物語...

9. 《リズ》から外へ ～ 末法宇宙の物語。

9-1. 《エリスウェサ体制》

その一族の髪の色から「銀の時代」とも呼ばれた《エリスウェサ体制》が長く続いた。

《リステラス》行政府をそのまま専横する形で、選別遺伝子による徹底的な階級差別統治をおこなう管理監視社会は、抑圧された低中層の人々に対して過去世界への郷愁をかきたて、歴史愛好家（イロニナズ）と呼ばれる趣味とも学術ともつかぬ知識の共有体は急速に膨らみ、やがてひとつの政治的・社会勢力を形成するほどになった。

9-2. 《リ・ズ》からの離脱。

喪われた過去の《理想世界》への憧憬と、息の詰まる現代社会のありようへの反発や絶望と厭世観のあまり、今や違法となった航時機や次元移動器の模造所持による不法な他銀河星系や異次元空間へ、また最も重罪とされる《過去世界》への逃亡逃散が、ひそかに、かつ公然たる、市民のムーブメントと化した。

9-3. 回収と懐柔。

育成に手間のかかる「個性と自我」を有した「高次脳機能強化労働」階級種族ほど自由逃亡への希求が激しかった為、人口と経済規模の維持に危惧を覚えた《エリスウェサ》首脳陣《リ・ズ》は、逃散した人々の呼び戻しのために惑星の私有や星系自治権の認可など、過去世代の政治形態を模した大幅な規制緩和と妥協を告知した。

9-4. 惑星独立（革命）運動

許可された惑星私有は数百年とまらずに夢を壊し混乱と悲嘆を産んだ。資金調達と許認可手続きの困難を乗り越え、苦勞して入植し開墾開拓した直後に、圧倒的な軍事力を背景とした通商管理権を楯に「自治」権を制限される例が相次ぎ、約定不履行に怒り「惑星の自主独立」を唱えて造反し武装決起する政体が相次いだ。

9-5. 《星海王》と《航路遮断》

この《エリスウェサ》の混乱に乗じて銀河星間航路には宇宙海賊や犯罪組織による違法が横行し、治安状況はまたたくまに暗黒時代と化した。

星間海賊群があまりにも強力になり各自治星軍ごときは蹴散らして跳梁跋扈したため、銀河の端と端では物資も情報もまともに届かない、交流もなく存在すら知らず知識も喪われ、また宇宙においては命も人権も保障されない、治安崩壊の末世となった。

この時、暴走を極め互いに潰しあい始めた海賊群を束ね、一定の縄張りとし力による恐怖支配という形で一定の秩序をもたらした、《星海王》または《星海女王》と呼ばれる数代の統治者が出現した。

最も華やかであったのが、《銀の闇》スィリーンと《黒い光》スェラの、二大女王分割時代である。

9-6. 「星間境界トンネル」

富裕層と商業勢力は海賊群による航路の崩壊を危惧して、早い時期より「危険な無法宇宙を経由しないで住む、安全確実な新交易通路を」と要求し、各企業は全力を挙げて、わずかに残されていた次元移動技術の知見を応用し、「星間境界トンネル」網を整備した。

富裕権力層はこれにより犯罪と汚濁の外界から逃れ、下界民からは「穴ぐら」と蔑称される廊内都市のぶ厚い擁壁の中から、外へ出ることは絶えてなくなっていった。

9 - 7

「下民ども」は監視を解かれたことを喜び、自由と混乱の末法の世を生き残れる者だけが自然交配によって子孫を残した。

遺伝子補修管理技術は「穴ぐら」の中に喪われ、無事に生まれ育つ優良遺伝子の子らは次第に減り、星間人口の漸減が進んだ。

9 - 8 .

「上内界」と「下外界」の二分化が完了し、ここに《リステラス》統一銀河時代は終わりを告げた。

(終)。

奥付

「あらすじ」の梗概。

この本は、とある銀河宇宙の歴史の始まりと...終わらない終わりの...物語、です。

対象読者は、まず私。

いじめとネグレクトでどこにも居場所がなく、小学2年でリストカットを始めた...私のための、物語。

すべては幻影。

流転する、まぼろしのなかの...「星の海」。

不登校児として保健室で自習し、副教材の「世界人権宣言」を読んで始めて、自分の居場所を持った。

「生きていていい。」と、言ってもらえた...

そんな孤独な子どもが、「ただ存在する」ことを赦される...

そんな広大な宇宙の、

塵のように小さな、わずかに光る魂たちの、

流転し、生成する...

歴史の、物語。

(目次) (仮) (※⇒項番統一！)

・応募フォーム (コピペ)

・表紙『あらすじです。』(宇宙史)

・「梗概」(「あらすじ」の「梗概」です。)

0『上古神代』～『四界神話』

1『涙滴大陸』年代記

幕間劇1《ヤツリーダーダム》の物語

《涙滴大陸》前期

幕間劇2《ヤツィーダム》の物語

《涙滴大陸》後期

幕間劇3《ヤチダモ族》の物語

2《大地世界》物語 ⇒別巻詳述

3《泥球界》の物語

4《美麗天地》創造

5《地球》統一史

6《三界》の物語

7《ジースト》の物語 ⇒別巻詳述

8 《統一銀河》の物語

9 《末法宇宙》の物語

X. 『女神たちの転生課題』

∞. 『喪われた星々の物語』

奥付

「あらすじです。」

(宇宙史)

(リステラス星圏史略)

(第2稿)

(2018.02.24.)

<https://puboo.jp/book/120562>

著者：霧樹里守（きりぎ・りす）

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/120562>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

「あらすじです。」 (宇宙史) (リステラス星圏史略・第1部) (最終稿)

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
